

パブリッククラウドにおける Threat Defense Virtual クラスタの展開

最終更新：2023年5月26日

パブリッククラウドでの Threat Defense Virtual 向けクラスタの展開

クラスタリングを利用すると、複数の Threat Defense Virtual をグループ化して1つの論理デバイスとすることができます。クラスタは、単一デバイスのすべての利便性（管理、ネットワークへの統合）を備える一方で、複数デバイスによって高いスループットおよび冗長性を達成します。以下を使用して、パブリッククラウドに Threat Defense Virtual クラスタを展開できます。

- Amazon Web Services (AWS)
- Microsoft Azure
- Google Cloud Platform (GCP)

ルーテッドファイアウォールモードのみがサポートされます。



(注) クラスタリングを使用する場合、一部の機能はサポートされません。[サポートされていない機能とクラスタリング \(58 ページ\)](#) を参照してください。

パブリッククラウドにおける Threat Defense Virtual クラスタリングについて

ここでは、クラスタリングアーキテクチャとその動作について説明します。

クラスタをネットワークに適合させる方法

クラスタは、複数のファイアウォールで構成され、これらは1つのデバイスとして機能します。ファイアウォールをクラスタとして機能させるには、次のインフラストラクチャが必要です。

- クラスタ内通信用の、隔離されたネットワーク。VXLAN インターフェイスを使用したクラスタ制御リンクと呼ばれます。レイヤ3物理ネットワーク上でレイヤ2仮想ネットワークとして機能する VXLAN により、Threat Defense Virtual はクラスタ制御リンクを介してブロードキャスト/マルチキャストメッセージを送信できます。

- ロードバランサ：パブリッククラウドに応じて、外部ロードバランシングには次のオプションがあります。

- AWS Gateway Load Balancer

AWS ゲートウェイロードバランサは、透過的なネットワークゲートウェイと、トラフィックを分散し、仮想アプライアンスをオンデマンドで拡張するロードバランサを組み合わせます。Threat Defense Virtual は、Geneve インターフェイスのシングルアームプロキシを使用して分散データプレーン（ゲートウェイロードバランサエンドポイント）を備えたゲートウェイロードバランサ集中型コントロールプレーンをサポートします。

- Azure ゲートウェイロードバランサ

Azure サービスチェーンでは、Threat Defense Virtual がインターネットと顧客サービス間のパケットをインターセプトできる透過的なゲートウェイとして機能します。Threat Defense Virtual は、ペアリングされたプロキシの VXLAN セグメントを利用して、単一の NIC に外部インターフェイスと内部インターフェイスを定義します。

- 内部および外部のネイティブ GCP ロードバランサ

- シスコクラウドサービスルータなどの内部および外部ルータを使用した等コストマルチパスルーティング (ECMP)

ECMP ルーティングでは、ルーティングメトリックが同値で最高である複数の「最適パス」を介してパケットを転送できます。EtherChannel のように、送信元および宛先の IP アドレスや送信元および宛先のポートのハッシュを使用してネクストホップの 1 つにパケットを送信できます。ECMP ルーティングにスタティックルートを使用する場合は、Threat Defense の障害発生時に問題が起きることがあります。ルートは引き続き使用されるため、障害が発生した Threat Defense へのトラフィックが失われるからです。スタティックルートを使用する場合は必ず、オブジェクトトラッキングなどのスタティックルートモニタリング機能を使用してください。ダイナミックルーティングプロトコルを使用してルートの追加と削除を行うことを推奨します。この場合は、ダイナミックルーティングに参加するように各 Threat Defense を設定する必要があります。



(注) レイヤ2 スパンド EtherChannels はロードバランシングではサポートされません。

AWS ゲートウェイロードバランサおよび Geneve シングルアームプロキシ

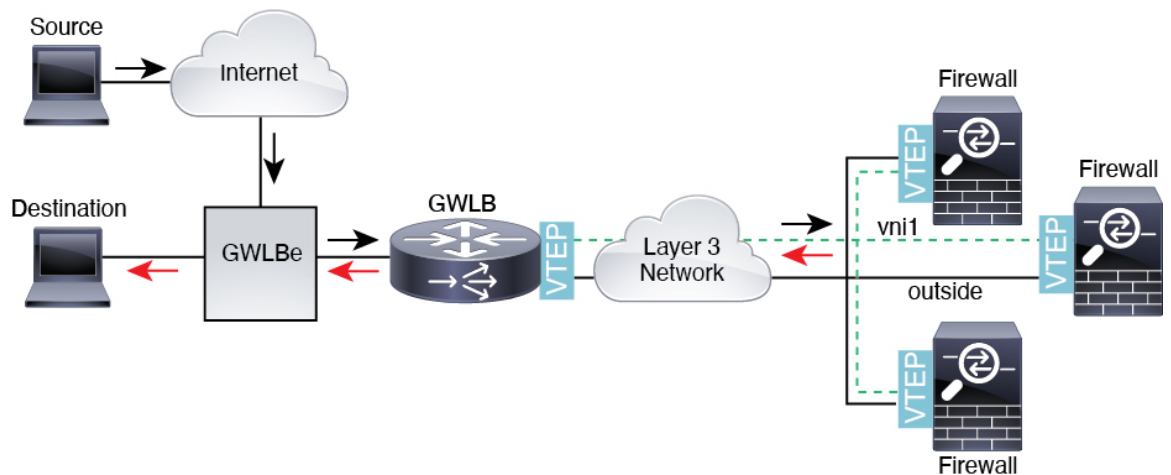


(注) この使用例は、現在サポートされている Geneve インターフェイスの唯一の使用例です。

AWS ゲートウェイロードバランサは、透過的なネットワークゲートウェイと、トラフィックを分散し、仮想アプライアンスをオンデマンドで拡張するロードバランサを組み合わせます。

Threat Defense Virtual は、分散データプレーン（ゲートウェイロードバランサエンドポイント）を備えたゲートウェイロードバランサ集中型コントロールプレーンをサポートします。次の図は、ゲートウェイロードバランサのエンドポイントからゲートウェイロードバランサに転送されるトラフィックを示しています。ゲートウェイロードバランサは、複数の Threat Defense Virtual の間でトラフィックのバランスを取り、トラフィックをドロップするか、ゲートウェイロードバランサに送り返す（Uターントラフィック）前に検査します。ゲートウェイロードバランサは、トラフィックをゲートウェイロードバランサのエンドポイントと宛先に送り返します。

図 1: Geneve シングルアームプロキシ

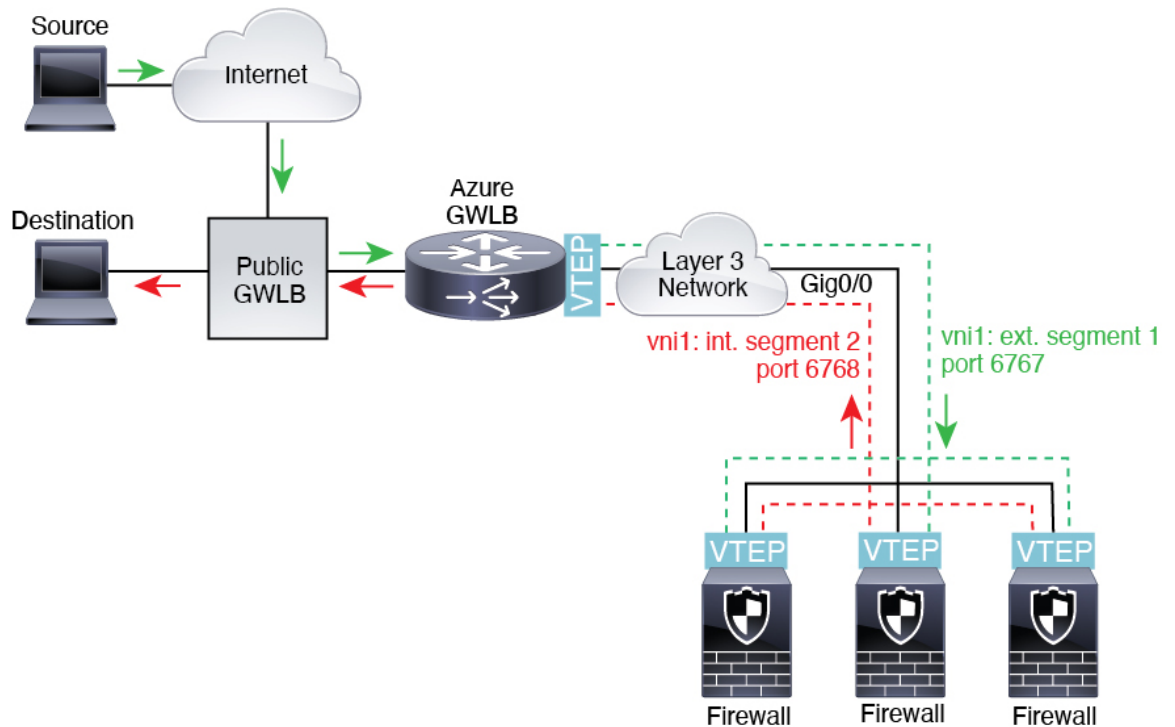


Azure ゲートウェイロードバランサおよびペアプロキシ

Azure サービスチェーンでは、Threat Defense Virtual がインターネットと顧客サービス間のパケットをインターセプトできる透過的なゲートウェイとして機能します。Threat Defense Virtual は、ペアリングされたプロキシの VXLAN セグメントを利用して、単一の NIC に外部インターフェイスと内部インターフェイスを定義します。

次の図は、外部 VXLAN セグメント上のパブリックゲートウェイロードバランサから Azure ゲートウェイロードバランサに転送されるトラフィックを示しています。ゲートウェイロードバランサは、複数の Threat Defense Virtual の間でトラフィックのバランスをとり、トラフィックをドロップするか、外部 VXLAN セグメント上のゲートウェイロードバランサに送り返す前に検査します。Azure ゲートウェイロードバランサは、トラフィックをパブリックゲートウェイロードバランサと宛先に送り返します。

図 2: ペアリングされたプロキシを使用した Azure Gateway ロードバランサ



個々のインターフェイス

クラスターフェイスを個々のインターフェイスとして設定できます。

個別インターフェイスは通常のルーテッドインターフェイスであり、それぞれが専用のローカルIPアドレスを持ちます。インターフェイス構成は、制御ノードでのみ設定する必要があり、各インターフェイスは DHCP を使用します。



(注) レイヤ 2 スパンド EtherChannels はサポートされません。

制御ノードとデータノードの役割

クラスタ内のメンバーの1つが制御ノードになります。複数のクラスターノードが同時にオンラインになる場合、制御ノードは、プライオリティ設定によって決まります。プライオリティは 1 ~ 100 の範囲内で設定され、1 が最高のプライオリティです。他のすべてのメンバーはデータノードです。最初にクラスターを作成するときに、制御ノードにするノードを指定します。これは、クラスターに追加された最初のノードであるため、制御ノードになります。

クラスタ内のすべてのノードは、同一の設定を共有します。最初に制御ノードとして指定したノードは、データノードがクラスターに参加するときにその設定を上書きします。そのため、クラスターを形成する前に制御ノードで初期設定を実行するだけで済みます。

機能によっては、クラスタ内でスケーリングしないものがあり、そのような機能については制御ノードがすべてのトラフィックを処理します。

クラスタ制御リンク

ノードごとに1つのインターフェイスをクラスタ制御リンク専用の VXLAN (VTEP) インターフェイスにする必要があります。

VXLAN トンネル エンドポイント

VXLAN トンネルエンドポイント (VTEP) デバイスは、VXLAN のカプセル化およびカプセル化解除を実行します。各 VTEP には2つのインターフェイスタイプ (VXLAN Network Identifier (VNI) インターフェイスと呼ばれる1つ以上の仮想インターフェイスと、VTEP 間に VNI をトンネリングする VTEP 送信元インターフェイスと呼ばれる通常のインターフェイス) があります。VTEP 送信元インターフェイスは、VTEP 間通信のトランスポート IP ネットワークに接続されます。

VTEP 送信元インターフェイス

VTEP 送信元インターフェイスは、VNI インターフェイスに関連付けられる予定の標準の Threat Defense Virtual インターフェイスです。1つの VTEP ソースインターフェイスをクラスタ制御リンクとして機能するように設定できます。ソースインターフェイスは、クラスタ制御リンクの使用専用に予約されています。各 VTEP ソースインターフェイスには、同じサブネット上の IP アドレスがあります。このサブネットは、他のすべてのトラフィックからは隔離し、クラスタ制御リンクインターフェイスだけが含まれるようにしてください。

VNI インターフェイス

VNI インターフェイスは VLAN インターフェイスに似ています。VNI インターフェイスは、タグgingを使用して特定の物理インターフェイスでのネットワークトラフィックの分割を維持する仮想インターフェイスです。設定できる VNI インターフェイスは1つだけです。各 VNI インターフェイスは、同じサブネット上の IP アドレスを持ちます。

ピア VTEP

単一の VTEP ピアを許可するデータインターフェイス用の通常の VXLAN とは異なり、Threat Defense Virtual クラスタリングでは複数のピアを設定できます。

クラスタ制御リンク トラフィックの概要

クラスタ制御リンク トラフィックには、制御とデータの両方のトラフィックが含まれます。

制御トラフィックには次のものが含まれます。

- 制御ノードの選択。
- 設定の複製。
- ヘルス モニタリング。

データ トラフィックには次のものが含まれます。

- 状態の複製。
- 接続所有権クエリおよびデータ パケット転送。

コンフィギュレーションの複製

クラスタ内のすべてのノードは、単一の設定を共有します。設定の変更は制御ノードでのみ可能（ブートストラップ設定は除く）で、変更はクラスタに含まれる他のすべてのノードに自動的に同期されます。

管理ネットワーク

管理インターフェイスを使用して各ノードを管理する必要があります。クラスタリングでは、データインターフェイスからの管理はサポートされていません。

Threat Defense Virtual クラスタリングのライセンス

各 Threat Defense Virtual クラスタノードには、同じパフォーマンス階層ライセンスが必要です。すべてのメンバーに同じ数の CPU とメモリを使用することをお勧めします。そうしないと、パフォーマンスが最小能力のメンバーに一致するようにすべてのノードで制限されます。スループットレベルは、一致するように制御ノードから各データノードに複製されます。

個別のノードではなく、クラスタ全体に機能ライセンスを割り当てます。ただし、クラスタの各ノードは機能ごとに個別のライセンスを使用します。クラスタリング機能自体にライセンスは必要ありません。

制御ノードを Management Center に追加する際に、そのクラスタに使用する機能ライセンスを指定できます。クラスタのライセンスは、[デバイス (Devices)] > [デバイス管理 (Device Management)] > [クラスタ (Cluster)] > [ライセンス (License)] 領域で変更できます。



- (注) Management Center にライセンスを取得する（および評価モードで実行する）前にクラスタを追加した場合、Management Center にライセンスを取得する際にポリシーの変更をクラスタに展開するとトラフィックの中断が発生することがあります。ライセンスモードを変更したことによって、すべてのデータユニットがクラスタをいったん離れてから再参加することになります。

Threat Defense Virtual クラスタリングの要件および前提条件

モデルの要件

- FTDv5、FTDv10、FTDv20、FTDv30、FTDv50、FTDv100



(注) FTDv5 および FTDv10 は、Amazon Web Services (AWS) ゲートウェイロードバランサをサポートしていません。

- 以下のパブリッククラウドサービス：
 - Amazon Web Services (AWS)
 - Microsoft Azure
 - Google Cloud Platform (GCP)
- 最大 16 ノード

[Cisco Secure Firewall Threat Defense Virtual スタートアップガイド](#) の Threat Defense Virtual の一般要件も参照してください。

ユーザの役割

- 管理者
- アクセス管理者
- ネットワーク管理者

ハードウェアおよびソフトウェアの要件

クラスタ内のすべてのユニット：

- 同じパフォーマンス層である必要があります。すべてのノードに同じ数の CPU とメモリを使用することをお勧めします。そうしないと、パフォーマンスが最小能力のノードに一致するようにすべてのノードで制限されます。
- GCP の場合、4 vCPU インスタンスタイプは使用できません。4 vCPU インスタンスタイプがサポートするインターフェイスは4つのみですが、インターフェイスは5つ必要です。
- Management Center へのアクセスは管理インターフェイスから行うこと。データインターフェイスの管理はサポートされていません。
- イメージアップグレード時を除き、同じソフトウェアを実行する必要があります。ヒットレスアップグレードがサポートされます。
- 単一の可用性ゾーンの展開がサポートされています。
- クラスタ制御リンクのインターフェイスは同じサブネット内に配置される必要があるため、クラスタは同じサブネットに展開する必要があります。

MTU

クラスタ制御リンクに接続されているポートに適切な MTU 値（高い値）が設定されていること。MTU の不一致がある場合、クラスタの形成に失敗します。クラスタ制御リンクの MTU は、データインターフェイスよりも 154 バイト大きく設定されているはずです。クラスタ制御リンクのトラフィックにはデータパケット転送が含まれるため、クラスタ制御リンクはデータパケット全体のサイズに加えてクラスタトラフィックのオーバーヘッド（100 バイト）と VXLAN のオーバーヘッド（54 バイト）にも対応する必要があります。

GWLB を使用する AWS の場合、データインターフェイスは Geneve カプセル化を使用します。この場合、イーサネットデータグラム全体がカプセル化されるため、新しいパケットのサイズが大きくなるため、より大きな MTU が必要になります。送信元インターフェイス MTU をネットワーク MTU + 326 バイトに設定する必要があります。したがって、標準の 1500 MTU ネットワークパスの場合、送信元インターフェイスの MTU は 1826 であり、クラスタ制御リンクの MTU は +154 の 1980 である必要があります。

GWLB を使用する Azure の場合、データインターフェイスは VXLAN カプセル化を使用します。この場合、イーサネットデータグラム全体がカプセル化されるため、新しいパケットのサイズが大きくなるため、より大きな MTU が必要になります。クラスタ制御リンクの MTU は、送信元インターフェイスの MTU の +80 バイトになるように設定する必要があります。

次の表は、クラスタ制御リンク MTU のデフォルト値とデータインターフェイス MTU を示しています。

表 1: デフォルト MTU

パブリック クラウド	クラスタ制御リンク MTU	データインターフェイス MTU
GWLB を使用した AWS	1980	1826
AWS	1654	1500
GWLB を使用した Azure	1454	1374
Azure	1454	1300
GCP	1554	1400

Threat Defense Virtual クラスタリングのガイドライン

ハイアベイラビリティ

クラスタリングでは、高可用性はサポートされません。

IPv6

クラスタ制御リンクは、IPv4 のみを使用してサポートされます。

その他のガイドライン

- 重要なトポロジの変更（EtherChannel インターフェイスの追加や削除、Threat Defense またはスイッチのインターフェイスの有効化や無効化、VSS または vPC を形成するスイッチの追加など）が発生した場合は、ヘルスチェック機能を無効にし、無効になっているインターフェイスのインターフェイスモニタリングも無効にする必要があります。トポロジの変更が完了して、コンフィギュレーション変更がすべてのユニットに同期されたら、インターフェイスのヘルス チェック機能を再度有効にできます。
- ノードを既存のクラスタに追加したときや、ノードをリロードしたときは、一時的に、限定的なパケット/接続ドロップが発生します。これは予定どおりの動作です。場合によっては、ドロップされたパケットが原因で接続がハングすることがあります。たとえば、FTP 接続の FIN/ACK パケットがドロップされると、FTP クライアントがハングします。この場合は、FTP 接続を再確立する必要があります。
- ノードでクラスタリングを無効にせずにノードの電源を切らないでください。
- 復号された TLS/SSL 接続の場合、復号状態は同期されず、接続オーナーに障害が発生すると、復号された接続がリセットされます。新規ノードへの接続を新たに確立する必要があります。復号されていない接続（復号しないルールに一致）は影響を受けず、正しく複製されます。
- ダイナミックスケールリングはサポートされていません。
- 各メンテナンスウィンドウの完了後にグローバル展開を実行します。
- 自動スケールグループ（AWS） / インスタンスグループ（GCP） / スケールセット（Azure）から一度に複数のデバイスを削除しないでください。また、自動スケールグループ（AWS） / インスタンスグループ（GCP） / スケールセット（Azure）からデバイスを削除する前に、デバイスで **cluster disable** コマンドを実行することを推奨します。
- クラスタ内のデータノードと制御ノードを無効にする場合は、制御ノードを無効にする前にデータノードを無効にすることを推奨します。クラスタ内に他のデータノードがあるときに制御ノードが無効になっている場合は、いずれかのデータノードを制御ノードに昇格させる必要があります。ロールの変更はクラスタを妨害する可能性があることに注意してください。

GCP ガイドライン

アウトバウンドトラフィックにはインターフェイス NAT が必要です。インターフェイス NAT を使用したアウトバウンドトラフィックは、64 k 接続に制限されています。

クラスタリングのデフォルト

- cLACP システム ID は自動生成され、システムの優先順位はデフォルトでは 1 になっています。
- クラスタのヘルスチェック機能は、デフォルトで有効になり、ホールド時間は3秒です。デフォルトでは、すべてのインターフェイスでインターネットヘルスモニタリングが有効になっています。

- 失敗したクラスタ制御リンクのクラスタ再結合機能が5分おきに無制限に試行されます。
- 失敗したデータインターフェ이스のクラスタ自動再結合機能は、5分後と、2に設定された増加間隔で合計で3回試行されます。
- HTTP トラフィックでは、5秒間の接続複製遅延がデフォルトで有効になっています。

AWS でクラスタを展開する

AWS にクラスタを展開する場合、手動で展開するか、スタックを展開する CloudFormation テンプレートを使用できます。AWS ゲートウェイロードバランサ、または Cisco Cloud Services Router などの非ネイティブのロードバランサでクラスタを使用できます。

CloudFormation テンプレートを使用した AWS へのスタックの展開

CloudFormation テンプレートを使用して AWS にスタックを展開します。

始める前に

- Python 3 をインストールした Linux コンピューターが必要です。
- クラスタが Management Center に自動登録されるようにするには、REST API を使用できる管理者権限を持つユーザーを Management Center で作成する必要があります。[Cisco Secure Firewall Management Center アドミニストレーションガイド](#)を参照してください。
- Configuration.JSON で指定したポリシー名と一致するアクセスポリシーを Management Center に追加します。

手順

ステップ 1 テンプレートを準備します。

- GitHub リポジトリをローカルフォルダに複製します。<https://github.com/CiscoDevNet/cisco-ftdv/tree/master/cluster/aws> を参照してください。
- 必要なパラメーターを使用して、**infrastructure.yaml** および **deploy_ngfw_cluster.yaml** を変更します。
- cloud-clustering/ftdv-cluster/lambda-python-files/Configuration.json** を初期設定に変更します。

次に例を示します。

```
{
  "licenseCaps": ["BASE", "MALWARE", "THREAT"],
  "performanceTier": "FTDv50",
  "fmcIpforDeviceReg": "DONTRESOLVE",
  "RegistrationId": "cisco",
  "NatId": "cisco",
```

```
"fmcAccessPolicyName": "AWS-ACL"
}
```

- `fmcIpforDeviceReg` 設定は DONTRESOLVE のままにします。
- `fmcAccessPolicyName` は、Management Center のアクセスポリシーと一致している必要があります。

- d) `cluster_layer.zip` という名前のファイルを作成して、重要な Python ライブラリを Lambda 関数に提供します。

Python 3.9 をインストールした Ubuntu 18.04 などの Linux 環境で、`cluster_layer.zip` を作成できます。

次のシェルスクリプトを実行して、`cluster_layer.zip` を作成します。

```
#!/bin/bash
mkdir -p layer
virtualenv -p /usr/bin/python3.9 ./layer/
source ./layer/bin/activate
pip3 install pycryptodome==3.12.0
pip3 install paramiko==2.7.1
pip3 install requests==2.23.0
pip3 install scp==0.13.2
pip3 install jsonschema==3.2.0
pip3 install cffi==1.15.1
pip3 install zipp==3.1.0
pip3 install importlib-metadata==1.6.0
echo "Copy from ./layer directory to ./python\n"
mkdir -p ./python/
cp -r ./layer/lib/python3.9/site-packages/* ./python/
zip -r cluster_layer.zip ./python
deactivate
```

- e) 結果の `cluster_layer.zip` ファイルを Lambda Python ファイルフォルダにコピーします。
- f) `cluster_manager.zip` および `cluster_lifecycle.zip` ファイルを作成します。

`make.py` ファイルは、複製されたリポジトリの最上位ディレクトリにあります。これにより、python ファイルが Zip ファイルに圧縮され、ターゲットフォルダにコピーされます。

python3 make.py build

ステップ 2 Infrastructure.yaml を展開し、クラスタ展開の出力値をメモします。

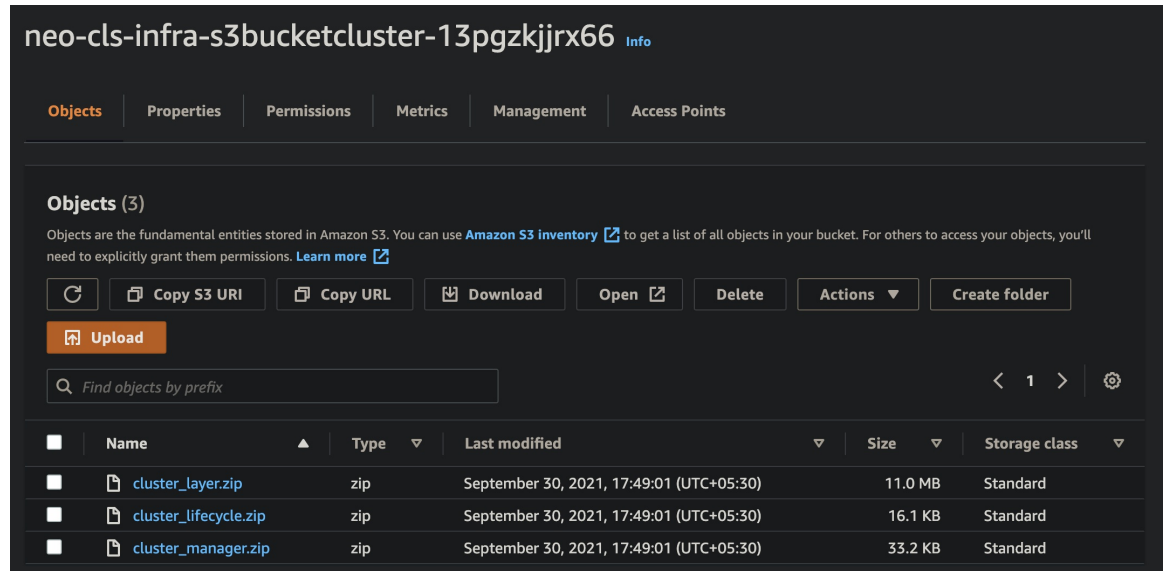
- AWS コンソールで、[CloudFormation] に移動し、[新しいリソース (標準) を使用 (With new resources(standard))] を選択して、[スタックの作成 (Create stack)] をクリックします。
- [テンプレートファイルのアップロード (Upload a template file)] を選択し、[ファイルの選択 (Choose file)] をクリックして、ターゲットフォルダから `infrastructure.yaml` を選択します。
- [次へ (Next)] をクリックして、必要な情報を入力します。
- [次へ (Next)]、[スタックの作成 (Create stack)] の順にクリックします。
- 展開が完了したら、[出力 (Outputs)] に移動し、S3 の `BucketName` を書き留めます。

図 3: Infrastructure.yaml の出力

Outputs (16)				
<input type="text" value="Search outputs"/>				
Key ▲	Value ▼	Description ▼	Export name	
AZ	me-south-1a	Availability zone	-	
AppInstanceSGId	sg-02b07af19c3e746d9	Security Group ID for Application Instances	-	
ApplicationSubnetIds	subnet-03217efc6049e5fee	Application subnet ID	-	
BucketName	neo-cls-infra-s3bucketcluster-13pgzkjrx66	Name of the sample Amazon S3 bucket with Private Static Web hosting Configuration	-	
BucketUrl	http://neo-cls-infra-s3bucketcluster-13pgzkjrx66.s3-website.me-south-1.amazonaws.com	URL of S3 Bucket Static Website	-	
CCLSubnetId	subnet-0caf6c4801922d8b1	CCL subnet ID	-	
EIPforNATgw	15.184.208.231	EIP reserved for NAT GW	-	
FmcInstanceSGID	sg-0a0d3797b04370aa3	Security Group ID for FMC if user would like to launch in this VPC itself	-	
InInterfaceSGId	sg-0522ebe5acb8a2827	Security Group ID for Instances Inside Interface	-	
InsideSubnetIds	subnet-056fdc9fe5389bf88	Inside subnet ID	-	
InstanceSGId	sg-0be5b62647eb53dec	Security Group ID for Instances Management Interface	-	
LambdaSecurityGroupId	sg-0347d191d724b2574	Security Group ID for Lambda Functions	-	
LambdaSubnetIds	subnet-0989fbaeb522a906c,subnet-0c7a9b649d506f930	List of lambda subnet IDs (comma seperated)	-	
MgmtSubnetIds	subnet-08c386d4b06890532	Mangement subnet ID	-	
UseGWLb	Yes	Use Gateway Load Balancer	-	
VpcName	vpc-0d94d3eaaa1f1354d	Name of the VPC created	-	

ステップ 3 **cluster_layer.zip**、**cluster_lifecycle.zip**、および **cluster_manager.zip** を `infrastructure.yaml` で作成した S3 バケットにアップロードします。

図 4: S3 バケット



ステップ 4 `deploy_ngfw_cluster.yaml` を展開します。

- [CloudFormation] に移動し、[新しいリソース（標準）を使用（With new resources(standard)）] を選択して、[スタックの作成（Create stack）] をクリックします。
- [テンプレートファイルのアップロード（Upload a template file）] を選択し、[ファイルの選択（Choose file）] をクリックして、ターゲットフォルダから `deploy_ngfw_cluster.yaml` を選択します。
- [次へ（Next）] をクリックして、必要な情報を入力します。
- [次へ（Next）]、[スタックの作成（Create stack）] の順にクリックします。

Lambda 関数が残りのプロセスを管理し、Threat Defense Virtual が自動的に Management Center に登録されます。

図 5: 展開されたリソース

Logical ID	Physical ID	Type	Status
ASmanagerTopic	arn:aws:sns:me-south-1:797661843114:neo-clis-1-1-autoscale-manager-topic	AWS::SNS::Topic	CREATE_COMPLETE
ClusterManager	neo-clis-1-1-manager-lambda	AWS::Lambda::Function	CREATE_COMPLETE
ClusterManagerLogGrp	/aws/lambda/neo-clis-1-1-manager-lambda	AWS::Logs::LogGroup	CREATE_COMPLETE
ClusterManagerSNS1	arn:aws:sns:me-south-1:797661843114:neo-clis-1-1-autoscale-manager-topicae9962ae-de5a-4274-afa1-b38fb815eedc	AWS::SNS::Subscription	CREATE_COMPLETE
ClusterManagerSNS1Permission	neo-clis-stack-ClusterManagerSNS1Permission-1QUGCC6QPBVAMM	AWS::Lambda::Permission	CREATE_COMPLETE
FTDvGroup	neo-clis-1-1	AWS::AutoScaling::AutoScalingGroup	CREATE_COMPLETE
FTDvLaunchTemplate	lt-073774ba8e52a7e70	AWS::EC2::LaunchTemplate	CREATE_COMPLETE
InstanceEvent	neo-clis-1-1-notify-instance-event	AWS::Events::Rule	CREATE_COMPLETE
InstanceEventInvokeLambdaPermission	neo-clis-stack-InstanceEventInvokeLambdaPermission-1HIWBJ9L356E2	AWS::Lambda::Permission	CREATE_COMPLETE
LambdaLayer	arn:aws:lambda:me-south-1:797661843114:layer:neo-clis-1-1-lambda-layer:1	AWS::Lambda::LayerVersion	CREATE_COMPLETE
LambdaPolicy	neo-cl-Lamb-JNZAR9J36KYQ	AWS::IAM::Policy	CREATE_COMPLETE
LambdaRole	neo-clis-1-1-Role	AWS::IAM::Role	CREATE_COMPLETE
LifeCycleEvent	neo-clis-1-1-lifecycle-action	AWS::Events::Rule	CREATE_COMPLETE
LifeCycleEventInvokeLambdaPermission	neo-clis-stack-LifeCycleEventInvokeLambdaPermission-7035X3FAVFF7	AWS::Lambda::Permission	CREATE_COMPLETE
LifeCycleLambda	neo-clis-1-1-lifecycle-lambda	AWS::Lambda::Function	CREATE_COMPLETE
LifeCycleLambdaLogGrp	/aws/lambda/neo-clis-1-1-lifecycle-lambda	AWS::Logs::LogGroup	CREATE_COMPLETE
gwlb	arn:aws:elasticloadbalancing:me-south-1:797661843114:loadbalancer/gw/neo-clis-1-1-GWLB/186e8004d09d30c5	AWS::ElasticLoadBalancingV2::LoadBalancer	CREATE_COMPLETE
listener	arn:aws:elasticloadbalancing:me-south-1:797661843114:listener/gw/neo-clis-1-1-GWLB/186e8004d09d30c5/18f58ff3f92fd13	AWS::ElasticLoadBalancingV2::Listener	CREATE_COMPLETE
tg	arn:aws:elasticloadbalancing:me-south-1:797661843114:targetgroup/neo-clis-1-1-GWLB-tg/0091e49395247fc955	AWS::ElasticLoadBalancingV2::TargetGroup	CREATE_COMPLETE

ステップ 5 いずれかのノードにログインし、**show cluster info** コマンドを入力して、クラスタの展開を確認します。

図 6: クラスタ ノード

Instance ID	Lifecycle	Instance ty...	Weighted capacity	Launch template/configuration
i-0a8a98d3bda571dc9	InService	c5.xlarge	-	neo-clis-1-1-ftd-launch-template
i-0f6c3f8ea3ba2b044	InService	c5.xlarge	-	neo-clis-1-1-ftd-launch-template

図 7: show cluster info

```
Cisco Firepower Extensible Operating System (FX-OS) v82.12.0 (build 182i)
Cisco Firepower Threat Defense for AWS v7.2.0 (build 1250)

>
>
>
> show cluster info
Cluster ftd-cluster: On
  Interface mode: individual
Cluster Member Limit : 16
  This is "29" in state MASTER
    ID       : 0
    Version  : 99.18(1)62
    Serial No.: 9A0HKNVX2JW
    CCL IP   : 1.1.1.29
    CCL MAC  : 06b1.3bf1.8920
    Module   : NGFWv
    Resource : 4 cores / 7680 MB RAM
    Last join : 12:55:57 UTC Sep 30 2021
    Last leave: N/A
Other members in the cluster:
  Unit "143" in state SLAVE
    ID       : 1
    Version  : 99.18(1)62
    Serial No.: 9AXQ6UCEBLQ
    CCL IP   : 1.1.1.143
    CCL MAC  : 069e.a363.0768
    Module   : NGFWv
    Resource : 4 cores / 7680 MB RAM
    Last join : 13:00:56 UTC Sep 30 2021
    Last leave: N/A
>
```

AWS でのクラスタの手動展開

クラスタを手動で展開するには、Day0 構成を準備し、各ノードを展開してから制御ノードを Management Center に追加します。

AWS 向け Day 0 構成の作成

固定構成またはカスタマイズ構成のいずれかを使用できます。

AWS 向け固定構成を使用した Day 0 構成の作成

固定構成により、クラスタのブートストラップ構成が自動生成されます。

```
{
  "AdminPassword": "password",
  "Hostname": "hostname",
  "FirewallMode": "Routed",
  "ManageLocally": "No",
  "Cluster": {
```

```

    "CclSubnetRange": "ip_address_start ip_address_end",
    "ClusterGroupName": "cluster_name",
    [For Gateway Load Balancer] "Geneve": "{Yes | No}",
    [For Gateway Load Balancer] "HealthProbePort": "port"
  }
}

```

次に例を示します。

```

{
  "AdminPassword": "Sup3rnatural",
  "Hostname": "ciscoftdv",
  "FirewallMode": "Routed",
  "ManageLocally": "No",
  "Cluster": {
    "CclSubnetRange": "10.10.55.4 10.10.55.30",
    "ClusterGroupName": "ftdv-cluster",
    "Geneve": "Yes",
    "HealthProbePort": "7777"
  }
}

```



(注) **CclSubnetRange** 変数については、*ip_address_start* 変数および *ip_address_end* 変数を使用して指定する IP アドレスの範囲が、*ip_address_start* 変数で指定した IP アドレスから最大で 16 個の IP アドレスという最適な範囲内にあることを確認してください。AWS の場合、IP アドレスの範囲は x.x.x.4 から開始する必要があります。

AWS ヘルスチェックの設定では、ここで設定した **HealthProbePort** を必ず指定してください。

AWS 向けカスタマイズ構成を使用した Day 0 構成の作成

コマンドを使用して、クラスタのブートストラップ設定をすべて入力できます。

```

{
  "AdminPassword": "password",
  "Hostname": "hostname",
  "FirewallMode": "Routed",
  "ManageLocally": "No",
  "run_config": [comma_separated_threat_defense_configuration]
}

```

ゲートウェイロードバランサの例

次の例では、U ターントラフィック用の 1 つの Geneve インターフェイスと、クラスタ制御リンク用の 1 つの VXLAN インターフェイスを備えたゲートウェイロードバランサの構成を作成します。太字の値はノードごとに一意である必要があることに注意してください。

```

{
  "AdminPassword": "Sam&Dean",
  "Hostname": "ftdv1",
  "FirewallMode": "Routed",
  "ManageLocally": "No",
  "run_config": [
    "cluster interface-mode individual force",

```



```

"interface TenGigabitEthernet0/0",
"nameif geneve-vtep-ifc",
"ip address dhcp",
"no shutdown",
"interface TenGigabitEthernet0/1",
"nve-only cluster",
"nameif ccl_link",
"ip address dhcp",
"no shutdown",
"interface vni1",
"description Clustering Interface",
"segment-id 1",
"vtep-nve 1",
"interface vni2",
"proxy single-arm",
"nameif uturn-ifc",
"vtep-nve 2",
"object network ccl_link",
"range 10.1.90.4 10.1.90.19",
"object-group network cluster_group",
"network-object object ccl_link",
"nve 2",
"encapsulation geneve",
"source-interface geneve-vtep-ifc",
"nve 1",
"encapsulation vxlan",
"source-interface ccl_link",
"peer-group cluster_group",
"jumbo-frame reservation",
"mtu geneve-vtep-ifc 1826",
"mtu ccl_link 1980",
"cluster group ftdv-cluster",
"local-unit 1",
"cluster-interface vni1 ip 10.1.1.1 255.255.255.0",
"priority 1",
"enable",
"aaa authentication listener http geneve-vtep-ifc port 7777"
]
}

```



- (注) クラスタ制御リンク ネットワーク オブジェクトには、アドレスを必要な数だけ指定します（最大 16 個）。範囲を大きくすると、パフォーマンスに影響する可能性があります。

AWS ヘルスチェックの設定では、ここで設定した **aaa authentication listener http** ポートを必ず指定してください。

非ネイティブロードバランサの例

次の例では、管理、内部、および外部インターフェイスと、クラスタ制御リンク用の VXLAN インターフェイスを使用して、非ネイティブロードバランサ用の構成を作成します。太字の値はノードごとに一意である必要があることに注意してください。

```

{
  "AdminPassword": "W1nch3sterBr0s",
  "Hostname": "ftdv1",
  "FirewallMode": "Routed",
  "ManageLocally": "No",

```

```

"run_config": [
  "cluster interface-mode individual force",
  "interface Management0/0",
  "management-only",
  "nameif management",
  "ip address dhcp",
  "interface GigabitEthernet0/0",
  "no shutdown",
  "nameif outside",
  "ip address dhcp",
  "interface GigabitEthernet0/1",
  "no shutdown",
  "nameif inside",
  "ip address dhcp",
  "interface GigabitEthernet0/2",
  "nve-only cluster",
  "nameif ccl_link",
  "ip address dhcp",
  "no shutdown",
  "interface vni1",
  "description Clustering Interface",
  "segment-id 1",
  "vtep-nve 1",
  "jumbo-frame reservation",
  "mtu ccl_link 1654",
  "object network ccl_link",
  "range 10.1.90.4 10.1.90.19",
  "object-group network cluster_group",
  "network-object object ccl_link",
  "nve 1",
  "encapsulation vxlan",
  "source-interface ccl_link",
  "peer-group cluster_group",
  "cluster group ftdv-cluster",
  "local-unit 1",
  "cluster-interface vni1 ip 10.1.1.1 255.255.255.0",
  "priority 1",
  "enable"
]
}

```

クラスタ制御リンク ネットワーク オブジェクトには、アドレスを必要な数だけ指定します（最大 16 個）。範囲を大きくすると、パフォーマンスに影響する可能性があります。

クラスタノードの展開

クラスタが形成されるようにクラスタノードを展開します。

手順

-
- ステップ 1 『Cisco Secure Firewall Threat Defense Virtual スタートアップガイド』 [英語] に従って各クラスタノードを展開します。
 - ステップ 2 [インスタンスの詳細設定 (Configure Instance Details)] > [高度な詳細 (Advanced Details)] セクションで、Day0 構成に貼り付けます。
 - ステップ 3 ロードバランサ ソリューションに応じて、インターフェースを接続します。

- AWS ゲートウェイロードバランサの4つのインターフェイス：外部、管理、診断、クラスタ制御リンク。
- 非ネイティブロードバランサの5つのインターフェイス：内部、外部、管理、診断、クラスタ制御リンク。

ステップ4 AWS ゲートウェイロードバランサを設定します。

- a) ゲートウェイロードバランサを作成し、ターゲットグループを割り当てます。
- b) ゲートウェイロードバランサのターゲットグループにノードを登録します。

ステップ5 Management Center に制御ノードを追加します。 [Management Center へのクラスタの追加（手動展開）（35 ページ）](#) を参照してください。

Azure でクラスタを展開する

Azure Gateway Load Balancer、または Cisco Cloud Services Router などの非ネイティブのロードバランサでクラスタを使用できます。Azure でクラスタを展開するには、Azure Resource Manager (ARM) テンプレートを 사용하여仮想マシンスケールセットを展開します。

Azure Resource Manager テンプレートを使用した GWLB の仮想マシンスケールセットの展開

カスタマイズされた Azure Resource Manager (ARM) テンプレートを使用して、Azure GWLB の仮想マシンスケールセットを展開します。

始める前に

- クラスタが Management Center に自動登録されるようにするには、REST API を使用できる管理者権限を持つユーザーを Management Center で作成する必要があります。 [Cisco Secure Firewall Management Center アドミニストレーションガイド](#) を参照してください。
- Configuration.JSON で指定したポリシー名と一致するアクセスポリシーを Management Center に追加します。

手順

ステップ1 テンプレートを準備します。

- a) GitHub リポジトリをローカルフォルダに複製します。 <https://github.com/CiscoDevNet/cisco-ftdv/tree/master/cluster/azure> を参照してください。
- b) GWLB の場合、`azure_ftdv_gwlb_cluster.json` と `azure_ftdv_gwlb_cluster_parameters.json` を必要なパラメータで変更します。GWLB 以外の場合は、`azure_ftdv_nlb_cluster.json` と `azure_ftdv_nlb_cluster_parameters.json` を変更します。

ステップ2 Azure ポータルにログイン：<https://portal.azure.com>。

ステップ3 リソース グループを作成します。

図 8: リソースグループの作成

Home > Resource groups >

Create a resource group ...

Basics Tags Review + create

Resource group - A container that holds related resources for an Azure solution. The resource group can include all the resources for the solution, or only those resources that you want to manage as a group. You decide how you want to allocate resources to resource groups based on what makes the most sense for your organization. [Learn more](#) ↗

Project details

Subscription * ⓘ MSDN Dev/Test Pay-As-You-Go(Converted to EA) ▼

Resource group * ⓘ ftdv-gwlb-demo ✓

Resource details

Region * ⓘ (US) East US ▼

ステップ4 管理、診断、外部、CCL の 4 つのサブネットを持つ仮想ネットワークを作成します。

a) 仮想ネットワークを作成します。

図 9: 仮想ネットワークの作成

Home > Resource groups > ftdv-gwlb-demo > Marketplace > Virtual network >

Create virtual network

Basics IP Addresses Security Tags Review + create

Azure Virtual Network (VNet) is the fundamental building block for your private network in Azure. VNet enables many types of Azure resources, such as Azure Virtual Machines (VM), to securely communicate with each other, the internet, and on-premises networks. VNet is similar to a traditional network that you'd operate in your own data center, but brings with it additional benefits of Azure's infrastructure such as scale, availability, and isolation. [Learn more about virtual network](#)

Project details

Subscription * ⓘ MSDN Dev/Test Pay-As-You-Go(Converted to EA) ▼

Resource group * ⓘ ftdv-gwlb-demo ▼
[Create new](#)

Instance details

Name * ftdv-gwlb-vnet ✓

Region * East US ▼

[Review + create](#) < Previous Next : IP Addresses > [Download a template for automation](#)

b) サブネットを追加します。

図 10: サブネットの追加

[Home](#) > [Resource groups](#) > [ftdv-gwlb-demo](#) > [Marketplace](#) > [Virtual network](#) >

Create virtual network ...

Basics **IP Addresses** Security Tags Review + create

The virtual network's address space, specified as one or more address prefixes in CIDR notation (e.g. 192.168.1.0/24).

IPv4 address space

10.45.0.0/16 ✓ 

Add IPv6 address space ⓘ

The subnet's address range in CIDR notation (e.g. 192.168.1.0/24). It must be contained by the address space of the virtual network.

[+](#) Add subnet [🗑](#) Remove subnet

<input type="checkbox"/> Subnet name	Subnet address range	NAT gateway
<input type="checkbox"/> Management	10.45.0.0/24	-
<input type="checkbox"/> Diagnostic	10.45.1.0/24	-
<input type="checkbox"/> Outside	10.45.2.0/24	-
<input type="checkbox"/> CCL	10.45.3.0/27	-

i A NAT gateway is recommended for outbound internet access from subnets. Edit the subnet to add a NAT gateway. [Learn more](#) [🔗](#)

[Review + create](#)

[< Previous](#)

[Next : Security >](#)

[Download a template for automation](#)

ステップ 5 カスタムテンプレートを展開します。

- [作成 (Create)] > [テンプレートの展開 (Template deployment)] (カスタムテンプレートを使用して展開) をクリックします。
- [エディタで独自のテンプレートを構築する (Build your own template in the editor)] をクリックします。
- [ファイルの読み込み (Load File)] をクリックし、**azure_ftdv_gwlb_cluster.json** または **azure_ftdv_nlb_cluster.json** をアップロードします。
- [保存 (Save)] をクリックします。

ステップ 6 インスタンスの詳細を設定します。

a) 必要な値を入力し、[確認して作成 (Review + create)] をクリックします。

図 11: Instance Details

Home > Microsoft.VirtualNetwork-20220802103957 | Overview > ftdv-gwlb-vnet > ftdv-gwlb-demo > Marketplace > Template deployment (deploy using custom templates) >

Custom deployment

Deploy from a custom template

Select a template **Basics** Review + create

Template

Customized template 15 resources

Edit template Edit parameters Visualize

Project details

Select the subscription to manage deployed resources and costs. Use resource groups like folders to organize and manage all your resources.

Subscription * MSDN Dev/Test Pay-As-You-Go(Converted to EA)

Resource group * ftdv-gwlb-demo

Create new

Instance details

Region * (US) East US

Resource Name Prefix gwlbdemo ✓

Virtual Network Rg ftdv-gwlb-demo ✓

Virtual Network Name ftdv-gwlb-vnet ✓

Virtual Network Cidr 10.45.0.0/16 ✓

Mgmt Subnet Management ✓

Diag Subnet Diagnostics ✓

Data Interface Subnet Outside ✓

Data Network Gateway Ip 10.45.2.1 ✓

Gateway Load Balancer IP 10.45.2.4 ✓

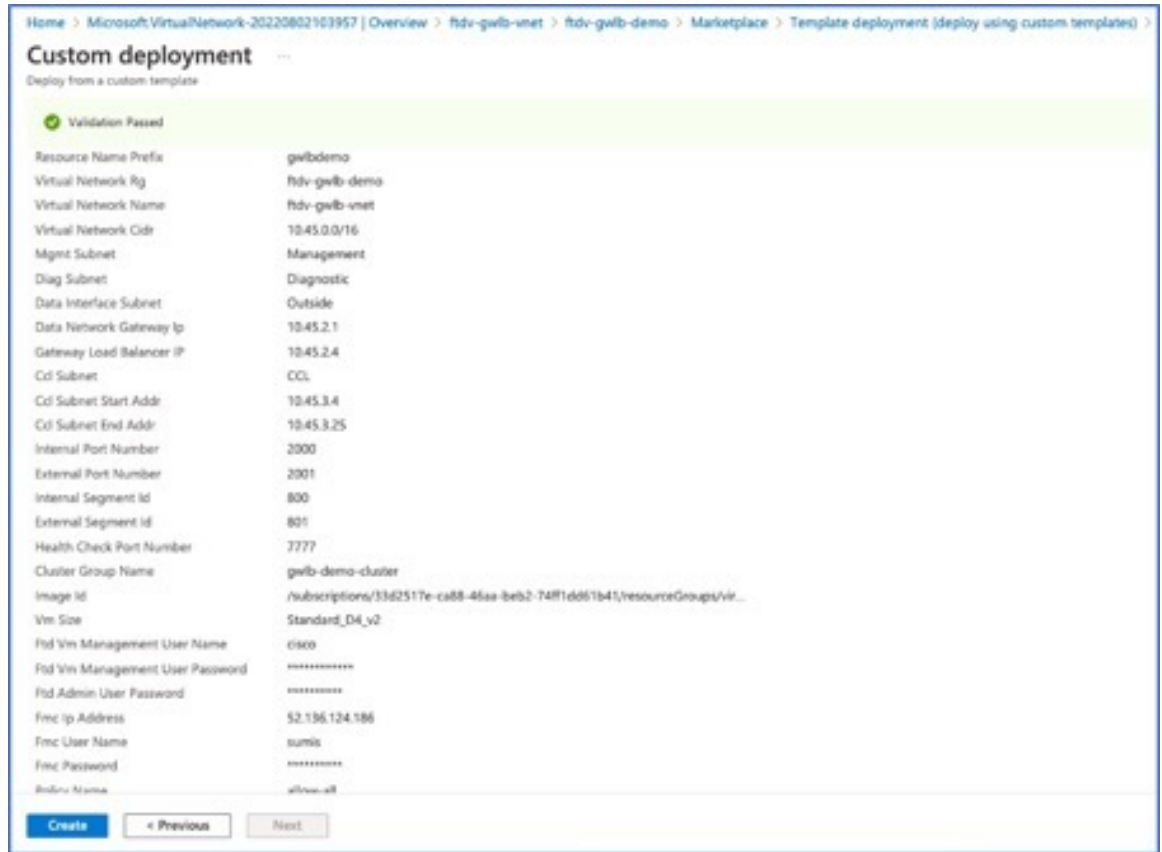
Ccl Subnet CCL ✓

Review + create < Previous Next: Review + create >

クラスタ制御リンクの開始アドレスと終了アドレスは、必要な数だけ指定してください (最大 16 個)。範囲を大きくすると、パフォーマンスに影響する可能性があります。

b) 検証に合格したら、[作成 (Create)] をクリックします。

図 12: カスタム展開の作成



ステップ 7 インスタンスの実行後、いずれかのノードにログインし、**show cluster info** コマンドを入力して、クラスタの展開を確認します。

図 13: show cluster info

```
> show cluster info
Cluster gwlb-cluster-template-with-AN: On
Interface mode: individual
Cluster Member Limit : 16
This is "12" in state CONTROL_NODE
ID : 0
Version : 99.19(1)180
Serial No.: 9AKGFV8VH4G
CCL IP : 10.1.1.12
CCL MAC : 000d.3a55.5470
Module : NGFWv
Resource : 8 cores / 28160 MB RAM
Last join : 11:13:24 UTC Sep 5 2022
Last Leave: N/A
```

ステップ 8 Azure ポータルで、Function アプリをクリックしてクラスタを Management Center に登録します。

(注) Function アプリを使用しない場合は、[追加 (Add)] > [デバイス (Device)] ([追加 (Add)] > [クラスタ (Cluster)] ではない) を使用して、制御ノードを Management Center に直接登録することもできます。その他のクラスタノードは自動的に登録されます。

ステップ 9 [展開センター (Deployment Center)] > [FTPSのログイン情報 (FTPS credentials)] > [ユーザースコープ (User scope)] > [ユーザー名とパスワードの設定 (Configure Username and Password)] をクリックして FTPS のログイン情報を作成し、[保存 (Save)] をクリックします。

図 14: FTPS のログイン情報

The screenshot shows the 'FTPS credentials' settings page in the Azure portal. At the top, there are navigation buttons: Save, Discard, Browse, Manage publish profile, Sync, and Leave Feedback. The page title is 'Settings FTPS credentials *'. Below the title, there is a descriptive paragraph: 'App Service supports multiple technologies to access, publish and modify the content of your app. FTPS credentials can be scoped to the application or the user.' The 'FTPS endpoint' field contains the value 'ftps://waws-prod-blu-231.ft.azurewebsites.windows.net/site/wwwroot'. The 'Application scope' section includes a description and a 'Learn more' link. It has fields for 'Username' (gwiban-function-app/\$gwiban-function-app) and 'Password' (masked). The 'User scope' section also includes a description and a 'Learn more' link. It has fields for 'Username' (sumis), 'Password' (masked), and 'Confirm Password' (masked). A 'Reset' button is visible next to the Application scope password field.

ステップ 10 ローカルの端末で次の curl 要求を実行し、Cluster_Function.zip ファイルを Function アプリにアップロードします。

```
curl -X POST -u ユーザー名 --data-binary @"Cluster_Function.zip" https://Function_App_Name.scm.azurewebsites.net/api/zipdeploy
```

関数が Function アプリにアップロードされます。関数が開始され、ストレージアカウントのアウトキューにログが表示されます。Management Center でのデバイス登録が開始されます。

図 15: 機能

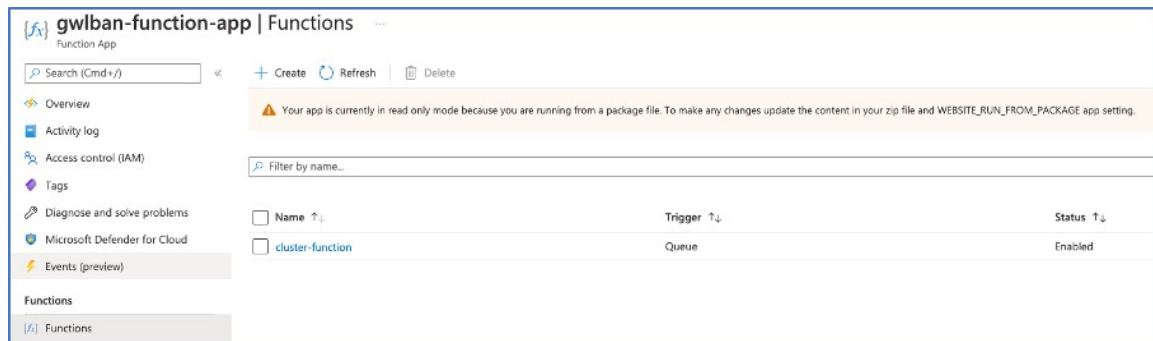


図 16: キュー

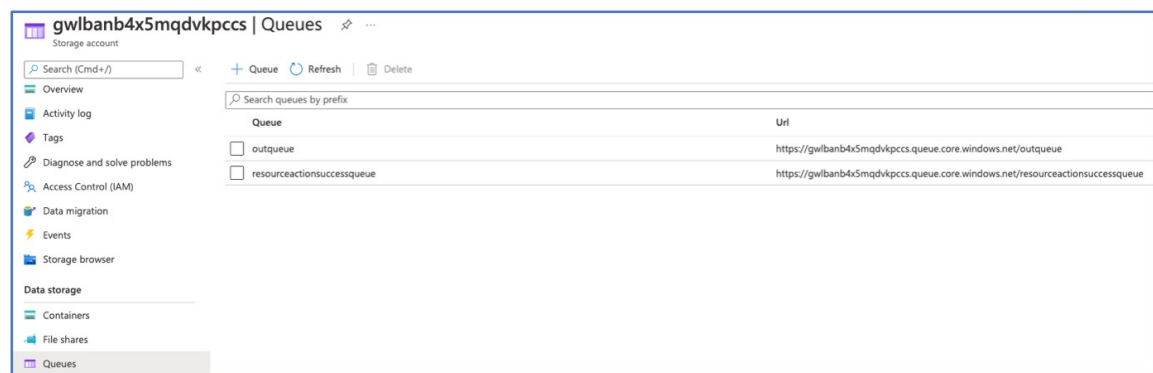
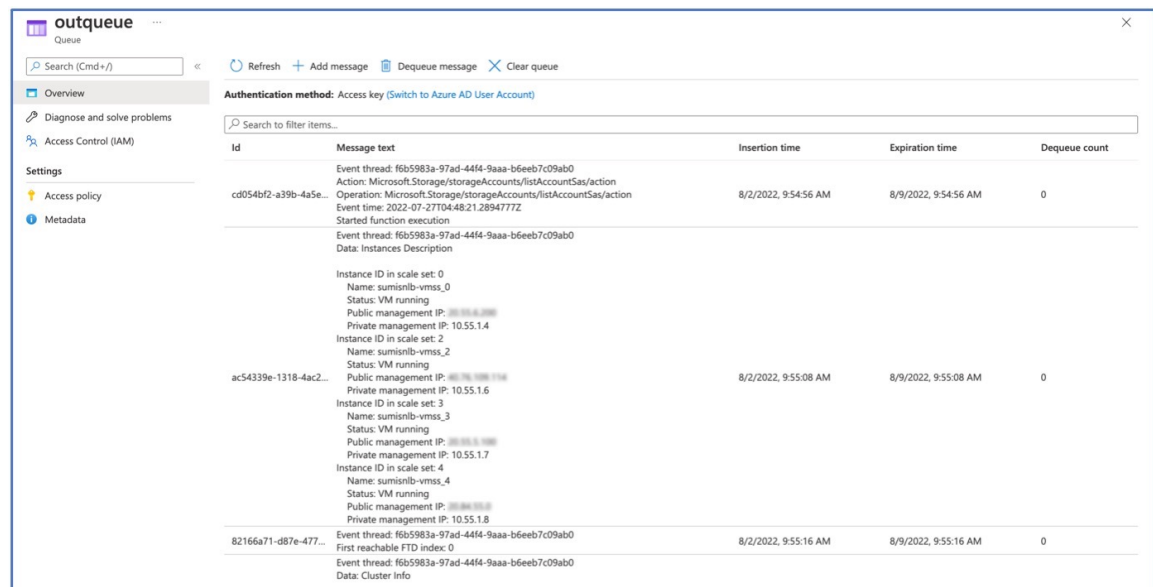


図 17: アウトキュー



Azure でのクラスタの手動展開

クラスタを手動で展開するには、Day0 構成を準備し、各ノードを展開してから制御ノードを Management Center に追加します。

Azure 向け Day 0 構成の作成

固定構成またはカスタマイズ構成のいずれかを使用できます。

Azure 向け固定構成を使用した Day 0 構成の作成

固定構成により、クラスタのブートストラップ構成が自動生成されます。

```
{
  "AdminPassword": "password",
  "FirewallMode": "Routed",
  "ManageLocally": "No",
  "Cluster": {
    "CclSubnetRange": "ip_address_start ip_address_end",
    "ClusterGroupName": "cluster_name",
    "HealthProbePort": "port_number",
    "GatewayLoadBalancerIP": "ip_address",
    "EncapsulationType": "vxlan",
    "InternalPort": "internal_port_number",
    "ExternalPort": "external_port_number",
    "InternalSegId": "internal_segment_id",
    "ExternalSegId": "external_segment_id"
  }
}
```

次に例を示します。

```
{
  "AdminPassword": "password",
  "FirewallMode": "routed",
  "ManageLocally": "No",
  "Cluster": {
    "CclSubnetRange": "10.10.55.4 10.10.55.254",
    "ClusterGroupName": "ngfwv-cluster",
    "HealthProbePort": "7777",
    "GatewayLoadBalanceIP": "10.10.54.4",
    "EncapsulationType": "vxlan",
    "InternalPort": "2000",
    "ExternalPort": "2000",
    "InternalSegId": "800",
    "ExternalSegId": "801"
  }
}
```



(注) **CclSubnetRange** 変数については、*ip_address_start* 変数および *ip_address_end* 変数を使用して指定する IP アドレスの範囲が、*ip_address_start* 変数で指定した IP アドレスから最大で 16 個の IP アドレスという最適な範囲内にあることを確認してください。Azure の場合、IP アドレスの範囲は x.x.x.4 から開始する必要があります。

Azure 正常性チェックの設定では、ここで設定した **HealthProbePort** を必ず指定してください。

Azure 向けカスタマイズ構成を使用した Day 0 構成の作成

コマンドを使用して、クラスタのブートストラップ設定をすべて入力できます。

```
{
  "AdminPassword": "password",
  "Hostname": "hostname",
  "FirewallMode": "Routed",
  "ManageLocally": "No",
  "run_config": [comma_separated_threat_defense_configuration]
}
```

次に例を示します。

```
{
  "AdminPassword": "Cisco@123123",
  "Hostname": "clsuterftdv",
  "FirewallMode": "routed",
  "ManageLocally": "No",
  "run_config": [
    "cluster interface-mode individual force",
    "policy-map global_policy",
    "class inspection_default",
    "no inspect h323 h225",
    "no inspect h323 ras",
    "no inspect rtsp",
    "no inspect skinny",

    "interface Management0/0",
    "management-only",
    "nameif management",
    "security-level 0",
    "ip address dhcp",

    "interface GigabitEthernet0/0",
    "no shutdown",
    "nameif vxlan_tunnel",
    "security-level 0",
    "ip address dhcp",

    "interface GigabitEthernet0/1",
    "no shutdown",
    "nve-only cluster",
    "nameif ccl_link",
    "security-level 0",
    "ip address dhcp",

    "interface vni1",
    "description Clustering Interface",
    "segment-id 1",
    "vtep-nve 1",

    "interface vni2",
    "proxy paired",
    "nameif GWLB-backend-pool",
    "internal-segment-id 800",
    "external-segment-id 801",
    "internal-port 2000",
    "external-port 2001",
    "security-level 0",
    "vtep-nve 2",
```

```

"object network ccl#link",
"range 10.10.55.4 10.10.55.30",
"object - group network cluster #group ",
"network-object object ccl#link",
"nve 1 ",
"encapsulation vxlan",
"source-interface ccl_link",
"peer-group cluster#group",
"nve 2 ",
"encapsulation vxlan",
"source-interface vxlan_tunnel",
"peer ip <GatewayLoadbalancerIP>",

"cluster group ftdv-cluster",
"local-unit 1",
"cluster-interface vnil ip 1.1.1.1 255.255.255.0",
"priority 1",
"enable",

"mtu vxlan_tunnel 1374",
"mtu ccl_link 1454"
]
}

```

クラスタノードの展開

クラスタが形成されるようにクラスタノードを展開します。

手順

-
- ステップ 1** 『[Cisco Secure Firewall Threat Defense Virtual スタートアップガイド](#)』にしたがって各クラスタノードを展開します。
- ステップ 2** Azure ARM テンプレートの **customData** フィールドに **day0** 構成を入力します。
- ステップ 3** ロードバランサ ソリューションに基づき、インターフェイスを接続します。
- GWLB ベースの展開、4つのインターフェイス（管理、診断、データ、クラスタ制御リンク）。
 - 非 GWLB ベースの展開、5つのインターフェイス（管理、診断、内部、外部、クラスタ制御リンク）。
- ステップ 4** Azure ゲートウェイロードバランサを設定します。詳細については、「[Azure ゲートウェイロードバランサを使用した Auto Scale の導入例](#)」を参照してください。
- ステップ 5** Management Center に制御ノードを追加します。[Management Center へのクラスタの追加（手動展開）](#)（35 ページ）を参照してください。
-

Azure でのトラブルシューティング クラスタ展開

- 問題：トラフィックフローがない
- トラブルシューティング：

- GWLB で展開された脅威防御仮想インスタンスの正常性プローブステータスが正常かどうかを確認します。
- 脅威防御仮想インスタンスの正常性プローブステータスが異常である場合：
 - Management Center Virtual で静的ルートが設定されているかどうかを確認します。
 - デフォルトゲートウェイがデータサブネットのゲートウェイ IP であるかどうかを確認します。
 - 脅威防御仮想インスタンスが正常性プローブトラフィックを受信しているかどうかを確認します。
 - Management Center Virtual で設定されたアクセスリストが正常性プローブトラフィックを許可しているかどうかを確認します。
- 問題：クラスタが形成されていない

トラブルシューティング：

- nve-only クラスタインターフェイスの IP アドレスを確認します。他のノードの nve-only のクラスタインターフェイスにピン可能であることを確認します。
- nve-only のクラスタインターフェイスの IP アドレスが、オブジェクトグループの一部であることを確認します。
- NVE インターフェイスがオブジェクトグループで設定されていることを確認します。
- クラスタグループのクラスタインターフェイスに適切な VNI インターフェイスがあることを確認します。この VNI インターフェイスには、対応するオブジェクトグループを持つ NVE があります。
- ノードが相互にピン可能であることを確認します。各ノードに独自のクラスタインターフェイス IP があるため、これらは相互にピン可能である必要があります。
- テンプレート展開中に指定された CCL サブネットの開始アドレスと終了アドレスが正しいかどうかを確認します。開始アドレスは、サブネット内で使用可能な最初の IP アドレスで始まる必要があります。たとえばサブネットが 192.168.1.0/24 の場合、開始アドレスは 192.168.1.4 である必要があります（最初の 3 つの IP アドレスは Azure によって予約されています）。
- Management Center Virtual に有効なライセンスがあるかどうかを確認します。

- 問題：同じリソースグループに再度リソースを展開しているときにロールに関連するエラーが発生する。

トラブルシューティング：端末で次のコマンドを使用して、以下のロールを削除します。

エラー メッセージ：

```
"error": {
  "code": "RoleAssignmentUpdateNotPermitted",
  "message": "Tenant ID, application ID, principal ID, and scope are not allowed to
```

```
be
updated."}
```

- **az role assignment delete --resource-group <リソースグループ名> --role "Storage Queue Data Contributor"**
- **az role assignment delete --resource-group <リソースグループ名> --role "Contributor"**

GCP でのクラスタの展開

クラスタを GCP で展開するには、手動で展開するか、インスタンステンプレートを使用してインスタンスグループを展開します。GCP ロードバランサ、または Cisco Cloud Services Router などの非ネイティブのロードバランサでクラスタを使用できます。

インスタンステンプレートを使用した GCP でのインスタンスグループの展開

インスタンステンプレートを使用して、GCP にインスタンスグループを展開します。

始める前に

- 展開には Google Cloud Shell を使用します。または、サポートされている任意のプラットフォームで Google SDK を使用できます。
- クラスタが Management Center に自動登録されるようにするには、REST API を使用できる管理者権限を持つユーザーを Management Center で作成する必要があります。[Cisco Secure Firewall Management Center アドミニストレーションガイド](#)を参照してください。
- `cluster_function_infra.yaml` で指定したポリシー名と一致するアクセスポリシーを Management Center に追加します。

手順

ステップ 1 テンプレートをローカルフォルダにダウンロードします。<https://github.com/CiscoDevNet/cisco-ftdv/tree/master/cluster/gcp> を参照してください。

ステップ 2 必要なパラメーターを使用して、`infrastructure.yaml`、`cluster_function_infra.yaml`、および `deploy_ngfw_cluster.yaml` を編集します。

Management Center が Threat Defense Virtual からリモートに配置され、Threat Defense Virtual に外部 IP アドレスが必要な場合は、`cluster_function_infra.yaml` で `deployWithExternalIP` を `True` に設定してください。

ステップ 3 クラスタインフラストラクチャの zip ファイルを作成します。

例：

```
zip -j ftdv_cluster_function.zip ./cluster-function/*
```

ステップ 4 Google Cloud Shell を使用してバケットを作成します。

```
gsutil mb --pap enforced gs:// resourceNamePrefix-ftdv-cluster-bucket/
```

`cluster_function_infra.yaml` で指定した `resourceNamePrefix-ftdv-cluster-bucket` の名前と一致させます。

ステップ 5 前に作成した Google ソースアーカイブをアップロードします。

```
gsutil cp ftdv_cluster_function.zip gs:// resourceNamePrefix-ftdv-cluster-bucket/
```

ステップ 6 インフラストラクチャを展開します。

```
gcloud deployment-manager deployments create cluster_name --config infrastructure.yaml
```

ステップ 7 Management Center Virtual と Threat Defense Virtual を同じネットワークで使用している場合は、GCP の管理ネットワークに仮想プライベートクラウド (VPC) を追加します。

- VPC を作成します。詳細については、Google Cloud のドキュメントを参照してください。
- SSH アクセス用の VPC コネクタを作成します。

```
gcloud compute networks vpc-access connectors create resourceNamePrefix-ssh --region us-central1 --subnet resourceNamePrefix-ftdv-mgmt-subnet28
```

ステップ 8 Management Center が Threat Defense Virtual からリモートに配置され、Threat Defense Virtual に外部 IP アドレスが必要な場合は、次を設定します。

- `cluster_function_infra.yaml` で `deployWithExternalIP` を `True` に設定します。
- `deploy_ngfw_cluster.jinja` で 58 ~ 62 行のコメントを外します。

```
accessConfigs:
- kind: compute#accessConfig
  name: External NAT
  type: ONE_TO_ONE_NAT
  networkTier: PREMIUM
```

ステップ 9 クラスタ機能インフラストラクチャを展開します。

```
gcloud deployment-manager deployments create cluster_name --config cluster_function_infra.yaml
```

ステップ 10 クラスタを展開します。

```
gcloud deployment-manager deployments create cluster_name --config north-south/deploy_ngfw_cluster.yaml
```

GCP でのクラスタの手動展開

クラスタを手動で展開するには、Day0 構成を準備し、各ノードを展開してから制御ノードを Management Center に追加します。

GCP 向け Day 0 構成の作成

固定構成またはカスタマイズ構成のいずれかを使用できます。

GCP 向け固定構成を使用した Day 0 構成の作成

固定構成により、クラスタのブートストラップ構成が自動生成されます。

```
{
  "AdminPassword": "password",
  "Hostname": "hostname",
  "FirewallMode": "Routed",
  "ManageLocally": "No",
  "Cluster": {
    "CclSubnetRange": "ip_address_start ip_address_end",
    "ClusterGroupName": "cluster_name"
  }
}
```

次に例を示します。

```
{
  "AdminPassword": "DeanWlnche$ter",
  "Hostname": "ciscoftdv",
  "FirewallMode": "Routed",
  "ManageLocally": "No",
  "Cluster": {
    "CclSubnetRange": "10.10.55.2 10.10.55.253",
    "ClusterGroupName": "ftdv-cluster"
  }
}
```



- (注) **CclSubnetRange** 変数については、*ip_address_start* 変数および *ip_address_end* 変数を使用して指定する IP アドレスの範囲が、*ip_address_start* 変数で指定した IP アドレスから最大で 16 個の IP アドレスという最適な範囲内にあることを確認してください。GCP の場合、IP アドレスの範囲は x.x.x.2 から開始する必要があります。

GCP 向けカスタマイズ構成を使用した Day 0 構成の作成

コマンドを使用して、クラスタのブートストラップ設定をすべて入力できます。

```
{
  "AdminPassword": "password",
  "Hostname": "hostname",
  "FirewallMode": "Routed",
  "ManageLocally": "No",
  "run_config": [comma_separated_threat_defense_configuration]
}
```

次の例では、管理、内部、および外部インターフェイスと、クラスタ制御リンク用の VXLAN インターフェイスを使用して構成を作成します。太字の値はノードごとに一意である必要があることに注意してください。

```
{
  "AdminPassword": "Wlnch3sterBr0s",
  "Hostname": "ftdvl",
  "FirewallMode": "Routed",
  "ManageLocally": "No",
```

```

"run_config": [
  "cluster interface-mode individual force",
  "interface Management0/0",
  "management-only",
  "nameif management",
  "ip address dhcp",
  "interface GigabitEthernet0/0",
  "no shutdown",
  "nameif outside",
  "ip address dhcp",
  "interface GigabitEthernet0/1",
  "no shutdown",
  "nameif inside",
  "ip address dhcp",
  "interface GigabitEthernet0/2",
  "nve-only cluster",
  "nameif ccl_link",
  "ip address dhcp",
  "no shutdown",
  "interface vni1",
  "description Clustering Interface",
  "segment-id 1",
  "vtep-nve 1",
  "object network ccl_link",
  "range 10.1.90.2 10.1.90.17",
  "object-group network cluster_group",
  "network-object object ccl_link",
  "nve 1",
  "encapsulation vxlan",
  "source-interface ccl_link",
  "peer-group cluster_group",
  "cluster group ftdv-cluster",
  "local-unit 1",
  "cluster-interface vni1 ip 10.1.1.1 255.255.255.0",
  "priority 1",
  "enable",
  "mtu outside 1400",
  "mtu inside 1400"
]
}

```



(注) クラスタ制御リンク ネットワーク オブジェクトには、アドレスを必要な数だけ指定します (最大 16個)。範囲を大きくすると、パフォーマンスに影響する可能性があります。

クラスタノードの展開

クラスタが形成されるようにクラスタノードを展開します。

手順

ステップ 1 5つのインターフェイス (外部、内部、管理、診断、クラスタ制御リンク) を備えた Day 0 構成を使用して、インスタンステンプレートを作成します ([**メタデータ (Metadata)**] > [**スタートアップスクリプト (Startup Script)**] セクション)。

[Cisco Secure Firewall Threat Defense Virtual スタートアップガイド](#) を参照してください。

- ステップ2** インスタンスグループを作成し、インスタンステンプレートを割り当てます。
- ステップ3** GCP ネットワークロードバランサ（内部および外部）を作成し、インスタンスグループを割り当てます。
- ステップ4** GCP ネットワークロードバランサの場合、Management Center のセキュリティポリシーでヘルスチェックを許可します。[GCP ネットワークロードバランサのヘルスチェックの許可（35 ページ）](#) を参照してください。
- ステップ5** Management Center に制御ノードを追加します。[Management Center へのクラスタの追加（手動展開）（35 ページ）](#) を参照してください。

GCP ネットワークロードバランサのヘルスチェックの許可

Google Cloud は、バックエンドがトラフィックに応答するかどうかを判断するヘルスチェック機能を提供します。

ネットワークロードバランサのファイアウォールルールを作成するには、「<https://cloud.google.com/load-balancing/docs/health-checks>」を参照してください。次に、Management Center でヘルスチェックトラフィックを許可するアクセスルールを作成します。必要なネットワーク範囲については、「<https://cloud.google.com/load-balancing/docs/health-check-concepts>」を参照してください。

また、動的な手動 NAT ルールを設定して、ヘルスチェックトラフィックを 169.254.169.254 の Google メタデータサーバーにリダイレクトする必要もあります。次に例を示します。

図 18: NAT ルール

						Original Packet			Translated Packet				
<input type="checkbox"/>	#	Direction	Type	Source Interface Objects	Destination Interface Objects	Original Sources	Original Destinations	Original Services	Translated Sources	Translated Destinations	Translated Services	Options	
NAT Rules Before													
<input type="checkbox"/>	1	↔	Dy...	inside	outside	hc1	ilb-south		ilb-south	metadata		Dns: false	🗑️
<input type="checkbox"/>	2	↔	Dy...	inside	outside	hc2	ilb-south		ilb-south	metadata		Dns: false	🗑️
<input type="checkbox"/>	3	↔	Dy...	inside	outside	hc3	ilb-south		ilb-south	metadata		Dns: false	🗑️
<input type="checkbox"/>	4	↔	Dy...	inside	outside	hc4	ilb-south		ilb-south	metadata		Dns: false	🗑️
<input type="checkbox"/>	5	↔	Dy...	outside	outside	hc1	elb-north		elb-north	metadata		Dns: false	🗑️
<input type="checkbox"/>	6	↔	Dy...	outside	outside	hc2	elb-north		elb-north	metadata		Dns: false	🗑️
<input type="checkbox"/>	7	↔	Dy...	outside	outside	hc3	elb-north		elb-north	metadata		Dns: false	🗑️
<input type="checkbox"/>	8	↔	Dy...	outside	outside	hc4	elb-north		elb-north	metadata		Dns: false	🗑️
<input type="checkbox"/>	9	↔	Dy...	inside	outside	any	obj-any		Interface	any		Dns: false	🗑️
<input type="checkbox"/>	10	↔	Dy...	outside	inside	obj-any	elb-north		Interface	ubuntu-south		Dns: false	🗑️
Auto NAT Rules													

Management Center へのクラスタの追加（手動展開）

クラスタを手動で展開した場合は、この手順を使用してクラスタを Management Center に追加します。CloudFormation テンプレート（AWS）、ARM テンプレート（Azure）、またはインス

タンステンプレート (GCP) を使用した場合、クラスタは自動的に Management Center に登録されます。

クラスタ ユニットのいずれかを新しいデバイスとして Management Center に追加します。Management Center は、他のすべてのクラスタ メンバーを自動検出します。

始める前に

- すべてのクラスタユニットは、Management Center に追加する前に、正常な形式のクラスタ内に存在している必要があります。また、どのユニットが制御ユニットかを確認することも必要です。Threat Defense **show cluster info** コマンドを使用します。

手順

ステップ 1 Management Center で、[デバイス (Devices)] > [デバイス管理 (Device Management)] を選択してから、[追加 (Add)] > [デバイスの追加 (Add Device)] を選択し、制御ユニットの管理 IP アドレスを使用して制御ユニットを追加します。

図 19: デバイスの追加

Add Device ?

CDO Managed Device

Host:†

Display Name:

Registration Key:*

Group:

Access Control Policy:*

Smart Licensing
Note: All virtual Firewall Threat Defense devices require a performance tier license. Make sure your Smart Licensing account contains the available licenses you need. It's important to choose the tier that matches the license you have in your account. Click [here](#) for information about the Firewall Threat Defense performance-tiered licensing. Until you choose a tier, your Firewall Threat Defense virtual defaults to the FTDv50 selection.

Performance Tier (only for Firewall Threat Defense virtual 7.0 and above):

Malware
 Threat
 URL Filtering

Advanced
Unique NAT ID:†

Transfer Packets

- a) [ホスト (Host)]フィールドに、制御ユニットの IP アドレスまたはホスト名を入力します。

最適なパフォーマンスを得るため、制御ユニットの追加を推奨しますが、クラスタの任意のユニットを追加できます。

デバイスのセットアップ時に NAT ID を使用した場合は、このフィールドを入力する必要がない可能性があります。

- b) [表示名 (Display Name)]フィールドに、Management Center での制御ユニットの表示名を入力します。

この表示名はクラスタ用ではありません。追加する制御ユニット専用です。後で、他のクラスタメンバーの名前やクラスタ表示名を変更できます。

- c) [登録キー (Registration Key)] フィールドに、デバイスの設定時に使用したのと同じ登録キーを入力します。登録キーは、1 回限り使用可能な共有シークレットです。
- d) マルチドメイン展開では、現在のドメインに関係なく、デバイスをリーフドメインに割り当てます。

現在のドメインがリーフドメインである場合、デバイスは自動的に現在のドメインに追加されます。現在のドメインがリーフドメインでない場合、登録後、デバイスを設定するために、リーフドメインに切り替える必要があります。

- e) (任意) デバイスをデバイスグループに追加します。
- f) 登録後すぐに、デバイスに展開する最初の [アクセス コントロール ポリシー (Access Control Policy)] を選択するか、新しいポリシーを作成します。

新しいポリシーを作成する場合は、基本ポリシーのみを作成します。必要に応じて、後でポリシーをカスタマイズできます。

New Policy

Name:

Description:

Select Base Policy:

Default Action:
 Block all traffic
 Intrusion Prevention
 Network Discovery

Snort3:

- g) デバイスに適用するライセンスを選択します。
- h) デバイスの設定時に、NAT ID を使用した場合、[詳細 (Advanced)] セクションを展開し、[一意の NAT ID (Unique NAT ID)] フィールドに同じ NAT ID を入力します。
- i) [パケットの転送 (Transfer Packets)] チェックボックスをオンにし、デバイスで Management Center にパケットを転送することを許可します。

このオプションは、デフォルトで有効です。このオプションを有効にして IPS や Snort などのイベントがトリガーされた場合は、デバイスが検査用としてイベントメタデータ情報とパケットデータを Management Center に送信します。このオプションを無効にした場合は、イベント情報だけが Management Center に送信され、パケットデータは送信されません。

- j) [登録 (Register)] をクリックします。

Management Center は、制御ユニットを識別して登録した後に、すべてのデータユニットを登録します。制御ユニットが正常に登録されていない場合、クラスタは追加されません。クラスタが稼働状態になかった場合や、接続問題などが原因で、登録エラーが発生する場合があります。こうした状況では、クラスタユニットを再度追加することをお勧めします。

[デバイス (Devices)] > [デバイス管理 (Device Management)] ページにクラスタ名が表示されます。クラスタを展開して、クラスタユニットを表示します。

図 20: クラスタの管理

Cluster	Unit	Model	Version	Actions	Policy
ftdcluster (2) Cluster	172.16.0.50(Control) Snort 3 172.16.0.50 - Routed	FTDv for VMware	7.2.0	Manage	Base, Threat (2 more...) Default AC Policy
	172.16.0.51 Snort 3 172.16.0.51 - Routed	FTDv for VMware	7.2.0	N/A	Base, Threat (2 more...) Default AC Policy

現在登録されているユニットには、ロードアイコンが表示されます。

図 21: ノードの登録

Cluster	Unit
ftdcluster (2) Cluster	172.16.0.50(Control) Snort 3 172.16.0.50 - Routed
	172.16.0.51 Snort 3 172.16.0.51 - Routed

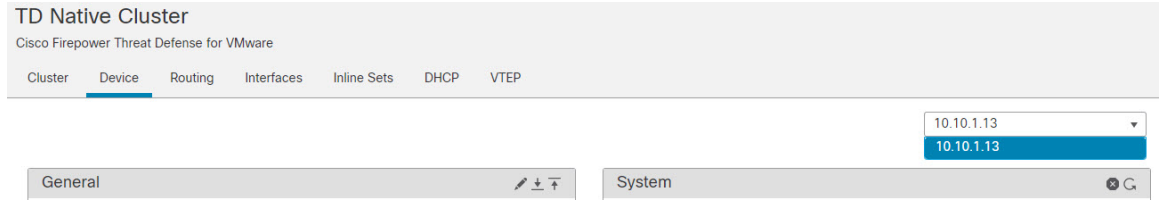
クラスタユニットの登録をモニターするには、[通知 (Notifications)] アイコンをクリックし、[タスク (Tasks)] を選択します。Management Center は、ユニットの登録ごとにクラスタ登録タスクを更新します。いずれかのユニットの登録に失敗した場合には、[クラスタノードの照合 \(50 ページ\)](#) を参照してください。

Deployments	Upgrades	Health	Tasks
3 total	0 running	3 success	0 warnings
		0 failures	
10.10.1.12	Deployment to device successful.	1m 54s	
10.10.1.13	Deployment to device successful.	1m 3s	
TD_Cluster	Deployment to device successful.	35s	

ステップ 2 クラスタの [編集 (Edit)] (✎) をクリックして、デバイス固有の設定を指定します。

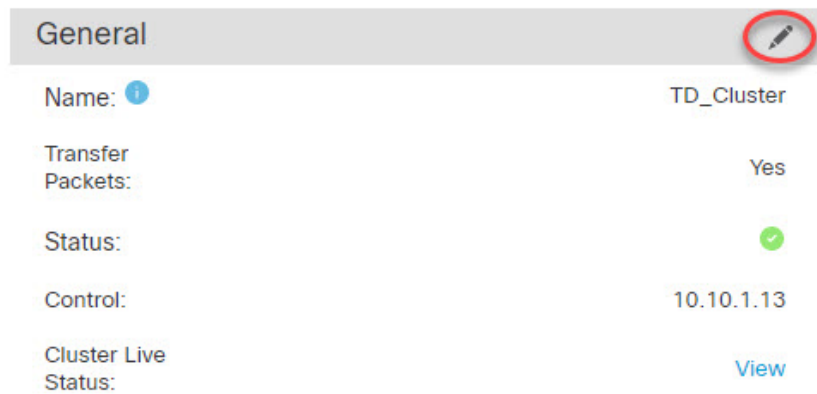
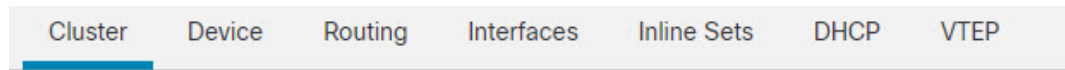
ほとんどの設定は、クラスタ内のノードではなく、クラスタ全体に適用できます。たとえば、ノードごとに表示名を変更できますが、インターフェイスはクラスタ全体についてのみ設定できます。1

ステップ3 [デバイス (Devices)] > [デバイス管理 (Device Management)] > [クラスタ (Cluster)] 画面に、[全般 (General)]、[ライセンス (License)]、[システム (System)]、および[ヘルス (Health)] の設定が表示されます。



次のクラスタ固有の項目を参照してください。

- [全般 (General)] > [名前 (Name)]: [編集 (Edit)] (✎) をクリックして、クラスタの表示名を変更します。



その後に、[名前 (Name)] フィールドを設定します。

General ?

Name:

Transfer Packets:

Compliance Mode:

Performance Profile:

TLS Crypto Acceleration:

Force Deploy: →

- [全般 (General)] > [クラスタステータスの表示 (View cluster status)] : [クラスタステータスの表示 (View cluster status)] リンクをクリックして [クラスタステータス (Cluster Status)] ダイアログボックスを開きます。

Cluster Device Routing Interfaces Inline Sets DHCP VTEP

General ✎

Name:	TD Native Cluster
Transfer Packets:	Yes
Status:	✔
Control:	10.10.1.13
Cluster Live Status:	View

[クラスタステータス (Cluster Status)] ダイアログボックスで、[照合 (Reconcile)] をクリックしてデータユニットの登録を再試行することもできます。

Cluster Status



Overall Status: Cluster has all nodes in sync

Nodes details (1)

[Refresh](#)[Reconcile All](#)

	Status	Device Name	Unit Name	Chassis URL	
>	In Sync.	10.10.1.13 Control	10.10.1.13	N/A	⋮

Dated: 11:22:40 | 30 Aug 2022

[Close](#)

- [ライセンス (License)] : [編集 (Edit)] (✎) をクリックして、ライセンス付与資格を設定します。

ステップ 4 [デバイス (Devices)] > [デバイス管理 (Device Management)] > [デバイス (Devices)] の右上のドロップダウンメニューで、クラスタ内の各メンバーを選択し、次の設定を指定することができます。

- [全般 (General)] > [名前 (Name)] : [編集 (Edit)] (✎) をクリックして、クラスタメンバーの表示名を変更します。

General	
Name:	10.89.5.21
Transfer Packets:	Yes
Mode:	routed
Compliance Mode:	None
TLS Crypto Acceleration:	Enabled

その後に、[名前 (Name)] フィールドを設定します。

General ?

Name:

Transfer Packets:

Mode: routed


Compliance Mode: None

Performance Profile: Default

TLS Crypto Acceleration: Disabled

Force Deploy: →

- [管理 (Management)] > [ホスト (Host)] : デバイス設定で管理 IP アドレスを変更する場
合、Management Center で新しいアドレスを一致させてネットワーク上のデバイスに到達
できるようにし、[管理 (Management)] 領域で [ホスト (Host)] アドレスを編集します。

Management	
Host:	10.89.5.20
Status:	✓

クラスタのヘルスマニターの設定

[クラスタ (Cluster)] ページの [クラスタヘルスマニターの設定 (Cluster Health Monitor Settings)]
セクションには、次の表で説明されている設定が表示されます。

図 22: クラスタのヘルスマニターの設定

Cluster Health Monitor Settings			
Timeouts			
Hold Time			3 s
Interface Debounce Time			9000 ms
Monitored Interfaces			
Service Application			Enabled
Unmonitored Interfaces			None
Auto-Rejoin Settings			
	Attempts	Interval Between Attempts	Interval Variation
Cluster Interface	-1	5	1
Data Interface	3	5	2
System	3	5	2

表 2: [クラスタヘルスマニターの設定 (Cluster Health Monitor Settings)] セクションテーブルのフィールド

フィールド	説明
タイムアウト	
保留時間 (Hold Time)	ノードの状態を確認するため、クラスタノードはクラスタ制御リンクで他のノードにハートビートメッセージを送信します。ノードが保留時間内にピアノードからハートビートメッセージを受信しない場合、そのピアノードは応答不能またはデッド状態と見なされます。
インターフェイスのデバウンス時間	インターフェイスのデバウンス時間は、インターフェイスで障害が発生していると見なされ、クラスタからノードが削除されるまでの時間です。
Monitored Interfaces	インターフェイスのヘルス チェックはリンク障害をモニターします。特定の論理インターフェイスのすべての物理ポートが、特定のノード上では障害が発生したが、別のノード上の同じ論理インターフェイスでアクティブポートがある場合、そのノードはクラスタから削除されます。ノードがメンバーをクラスタから削除するまでの時間は、インターフェイスのタイプと、そのノードが確立済みノードであるか、またはクラスタに参加しようとしているかによって異なります。
サービスアプリケーション	Snort プロセスおよび disk-full プロセスが監視されているかどうかを示します。

フィールド	説明
モニタリング対象外のインターフェイス	モニタリング対象外のインターフェイスを表示します。
自動再結合の設定	
クラスタインターフェイス	クラスタ制御リンクの自動再結合の設定の不具合を表示します。
データインターフェイス	データインターフェイスの自動再結合の設定を表示します。
システム (System)	内部エラー時の自動再結合の設定を表示します。内部の障害には、アプリケーション同期のタイムアウト、矛盾したアプリケーションステータスなどがあります。



- (注) システムのヘルスチェックを無効にすると、システムのヘルスチェックが無効化されている場合に適用されないフィールドは表示されません。

このセクションからこれらの設定を行うことができます。

任意のポートチャネル ID、単一の物理インターフェイス ID、Snort プロセス、および disk-full プロセスを監視できます。ヘルスマニタリングは VLAN サブインターフェイス、または VNI や BVI などの仮想インターフェイスでは実行されません。クラスタ制御リンクのモニタリングは設定できません。このリンクは常にモニターされています。

手順

- ステップ 1 [デバイス (Devices)] > [デバイス管理 (Device Management)] を選択します。
- ステップ 2 変更するクラスタの横にある [編集 (Edit)] (✎) をクリックします。
マルチドメイン展開では、リーフドメインにいない場合、システムによって切り替えるように求められます。
- ステップ 3 [クラスタ (Cluster)] をクリックします。
- ステップ 4 [クラスタのヘルスマニターの設定 (Cluster Health Monitor Settings)] セクションで、[編集 (Edit)] (✎) をクリックします。
- ステップ 5 [ヘルスチェック (Health Check)] スライダーをクリックして、システムのヘルスチェックを無効にします。

図 23: システムヘルスチェックの無効化

何らかのトポロジ変更（たとえばデータインターフェイスの追加/削除、ノードやスイッチのインターフェイスの有効化/無効化、VSSやvPCを形成するスイッチの追加）を行うときには、システムのヘルスチェック機能を無効にし、無効化したインターフェイスのモニタリングも無効にしてください。トポロジの変更が完了して、設定の変更がすべてのノードに同期されたら、システムのヘルスチェック機能を再度有効にてインターフェイスをモニタリングできます。

ステップ 6 ホールド時間とインターフェイスのデバウンス時間を設定します。

- [ホールド時間 (Hold Time)]: ノードのハートビート ステータス メッセージの時間間隔を指定します。指定できる範囲は3～45秒で、デフォルトは3秒です。
- [インターフェイスのデバウンス時間 (Interface Debounce Time)]: デバウンス時間は300～9000 ms の範囲で値を設定します。デフォルトは500 ms です。値を小さくすると、インターフェイスの障害をより迅速に検出できます。デバウンス時間を短くすると、誤検出の可能性が高くなることに注意してください。インターフェイスのステータス更新が発生すると、インターフェイス障害としてマーク付けされるまで、ノードは指定されたミリ秒数待機します。その後、ノードはクラスタから削除されます。EtherChannel がダウン状態からアップ状態に移行する場合（スイッチがリロードされた、スイッチでEtherChannel が有効になったなど）、デバウンス時間がより長くなり、ポートのバンドルにおいて別のクラスタノードの方が高速なため、クラスタノードでインターフェイスの障害が表示されることを妨げることがあります。

ステップ 7 ヘルス チェック失敗後の自動再結合クラスタ設定をカスタマイズします。

図 24: 自動再結合の設定

▼ Auto-Rejoin Settings

Cluster Interface

Attempts Range: 0-65535 (-1 for unlimited number of attempts)

Interval Between Attempts Range: 2-60 minutes between rejoin attempts

Interval Variation Range: 1-3. Defines if the interval duration increases. 1 (no change); 2 (2 x the previous duration), or 3 (3 x the previous duration).

Data Interface

Attempts Range: 0-65535 (-1 for unlimited number of attempts)

Interval Between Attempts Range: 2-60 minutes between rejoin attempts

Interval Variation Range: 1-3. Defines if the interval duration increases. 1 (no change); 2 (2 x the previous duration), or 3 (3 x the previous duration).

System

Attempts Range: 0-65535 (-1 for unlimited number of attempts)

Interval Between Attempts Range: 2-60 minutes between rejoin attempts

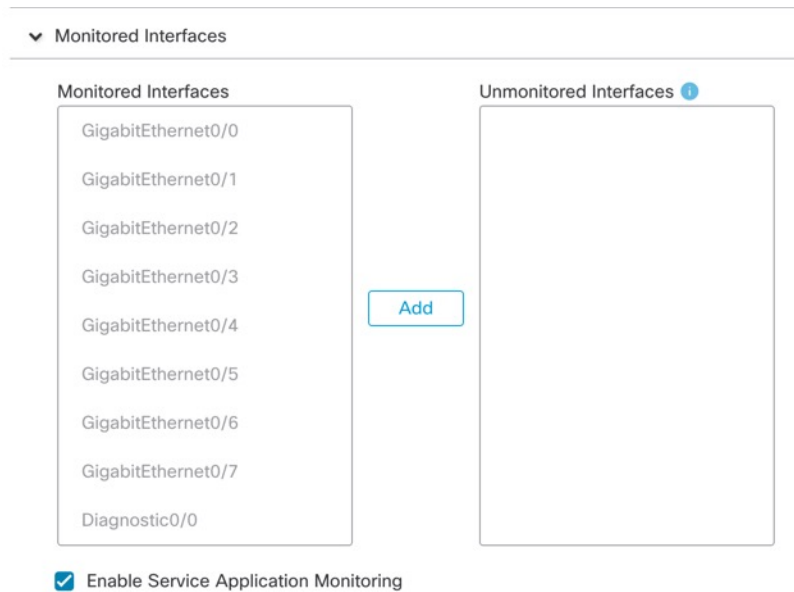
Interval Variation Range: 1-3. Defines if the interval duration increases. 1 (no change); 2 (2 x the previous duration), or 3 (3 x the previous duration).

[クラスターインターフェイス (Cluster Interface)]、[データインターフェイス (Data Interface)]、および[システム (System)]に次の値を設定します (内部エラーには、アプリケーションの同期タイムアウト、一貫性のないアプリケーションステータスなどがあります)。

- [試行数 (Attempts)]: 再結合の試行回数を 0 ~ 65535 の範囲の値に設定します。0 は自動再結合をディセーブルにします。[クラスターインターフェイス (Cluster Interface)]のデフォルト値は -1 (無制限) です。[データインターフェイス (Data Interface)]と [システム (System)]のデフォルト値は 3 です。
- [試行の間隔 (Interval Between Attempts)]: 再結合試行の間隔を 2 ~ 60 の分単位で定義します。デフォルト値は 5 分です。クラスタへの再参加をノードが試行する最大合計時間は、最後の障害発生時から 14400 分 (10 日) に制限されます。
- [間隔のバリエーション (Interval Variation)] : 間隔を増加させるかどうかを定義します。1 ~ 3 の範囲で値を設定します (1: 変更なし、2: 直前の間隔の 2 倍、3: 直前の間隔の 3 倍)。たとえば、間隔を 5 分に設定し、変分を 2 に設定した場合は、最初の試行が 5 分後、2 回目の試行が 10 分後 (2 x 5)、3 階目の試行が 20 分後 (2 x 10) となります。デフォルト値は、[クラスターインターフェイス (Cluster Interface)]の場合は 1、[データインターフェイス (Data Interface)]および [システム (System)]の場合は 2 です。

ステップ 8 [モニタリング対象のインターフェイス (Monitored Interfaces)]または[(モニタリング対象外のインターフェイス (Unmonitored Interfaces)) ウィンドウでインターフェイスを移動して、モニタリング対象のインターフェイスを設定します。[サービスアプリケーションのモニタリングを有効にする (Enable Service Application Monitoring)]をオンまたはオフにして、Snort プロセスと disk-full プロセスのモニタリングを有効または無効にすることもできます。

図 25: モニタリング対象インターフェイスの設定



インターフェイスのヘルスチェックはリンク障害をモニターします。特定の論理インターフェイスのすべての物理ポートが、特定のノード上では障害が発生したが、別のノード上の同じ論理インターフェイスでアクティブポートがある場合、そのノードはクラスタから削除されます。ノードがメンバーをクラスタから削除するまでの時間は、インターフェイスのタイプと、そのノードが確立済みノードであるか、またはクラスタに参加しようとしているかによって異なります。デフォルトでは、ヘルスチェックはすべてのインターフェイス、および Snort プロセスと disk-full プロセスで有効になっています。

たとえば、管理インターフェイスなど、必須以外のインターフェイスのヘルスモニタリングを無効にできます。

何らかのトポロジ変更（たとえばデータインターフェイスの追加/削除、ノードやスイッチのインターフェイスの有効化/無効化、VSSやvPCを形成するスイッチの追加）を行うときには、システムのヘルスチェック機能を無効にし、無効化したインターフェイスのモニタリングも無効にしてください。トポロジの変更が完了して、設定の変更がすべてのノードに同期されたら、システムのヘルスチェック機能を再度有効にてインターフェイスをモニタリングできます。

ステップ 9 [保存 (Save)] をクリックします。

ステップ 10 構成の変更を展開します。Cisco Secure Firewall Management Center アドミニストレーション ガイドを参照してください。

クラスタノードの管理

クラスタリングを無効にする

ノードの削除に備えて、またはメンテナンスのために一時的にノードを非アクティブ化する場合があります。この手順は、ノードを一時的に非アクティブ化するためのものです。ノードは引き続き Management Center のデバイスリストに表示されます。ノードが非アクティブになると、すべてのデータインターフェイスがシャットダウンされます。



(注) クラスタリングを無効にせずにノードの電源を切らないでください。

手順

- ステップ 1** 無効にするユニットに対して、[デバイス (Devices)]>[デバイス管理 (Device Management)]の順に選択して **その他 (⋮)** をクリックし、[ノードのクラスタリングを無効にする (Disable Node Clustering)]を選択します。
- ステップ 2** ノードのクラスタリングを無効にすることを確認します。
ノードは、[デバイス (Devices)]>[デバイス管理 (Device Management)]リストの名前の横に [(無効 (Disabled))] と表示されます。
- ステップ 3** クラスタリングを再び有効にするには、[クラスタへの再参加 \(49 ページ\)](#) を参照してください。

クラスタへの再参加

(たとえば、インターフェイスで障害が発生したために) ノードがクラスタから削除された場合、または手動でクラスタリングを無効にした場合は、クラスタに手動で再参加する必要があります。クラスタへの再参加を試行する前に、障害が解決されていることを確認します。ノードをクラスタから削除できる理由の詳細については、「[クラスタへの再参加 \(66 ページ\)](#)」を参照してください。

手順

- ステップ 1** 再度有効にするユニットに対して、[デバイス (Devices)]>[デバイス管理 (Device Management)]の順に選択して **その他 (⋮)** をクリックし、[ノードのクラスタリングを有効にする (Enable Node Clustering)]を選択します。 >
- ステップ 2** ノードのクラスタリングを有効にすることを確認します。

クラスタノードの照合

クラスタノードの登録に失敗した場合は、デバイスから Management Center に対してクラスタメンバーシップを照合できます。たとえば、Management Center が特定のプロセスで占領されているか、ネットワークに問題がある場合、データノードの登録に失敗することがあります。

手順

ステップ 1 クラスタの [Devices] > [Device Management] > その他 (🔍) を選択し、次に [Cluster Live Status] を選択して [Cluster Status] ダイアログボックスを開きます。

ステップ 2 [すべてを照合 (Reconcile All)] をクリックします。

図 26: すべてを照合

Cluster Status

Overall Status: 🟢 Cluster has all nodes in sync

Nodes details (2) Refresh Reconcile All

	Status	Device Name	Unit Name	Chassis URL	
>	In Sync.	172.16.0.50 Control	172.16.0.50	N/A	⋮
>	In Sync.	172.16.0.51	172.16.0.51	N/A	⋮

Dated: 11:52:26 | 20 Dec 2021 Close

クラスタ ステータスの詳細については、[クラスタのモニタリング \(51 ページ\)](#) を参照してください。

Management Center からのクラスタまたはノードの削除

Management Center からクラスタを削除できます。これにより、クラスタはそのまま維持されます。クラスタを新しい Management Center に追加する場合は、クラスタを削除してもかまいません。

クラスタからノードを除外することなく、Management Center からノードを削除することもできます。ノードは Management Center に表示されていませんが、まだクラスタの一部であり、

引き続きトラフィックを渡して制御ノードになることも可能です。現在動作している制御ノードを削除することはできません。Management Center から到達不可能になったノードは削除してもかまいませんが、クラスタの一部として残しておくことも可能です。

手順

ステップ 1 [デバイス (Devices)]>[デバイス管理 (Device Management)]の順に選択し、クラスタかノードの **その他** (🔗) をクリックして [削除 (Delete)]を選択します。

ステップ 2 クラスタかノードを削除するよう求められたら、[はい (Yes)]をクリックします。

ステップ 3 新しい Management Center にクラスタを追加するには、[デバイス (Devices)]>[デバイス管理 (Device Management)]の順に選択し、[デバイスの追加 (Add Device)]をクリックします。

クラスタメンバーの1つをデバイスとして追加するだけで、残りのクラスタノードが検出されます。

削除したノードを再度追加する方法については、「[クラスタノードの照合 \(50 ページ\)](#)」を参照してください。


クラスタのモニタリング

クラスタは、Management Center と Threat Defense の CLI でモニターできます。

- [クラスタステータス (Cluster Status)] ダイアログボックスには、[デバイス (Devices)]>[デバイス管理 (Device Management)]> **その他** (🔗) アイコンから、または [デバイス (Devices)]>[デバイス管理 (Device Management)]>[クラスタ (Cluster)] ページ>[全般 (General)] 領域>[クラスタのライブステータス (Cluster Live Status)] リンクからアクセスできます。 > > >

図 27: クラスタのステータス

Cluster Status ?

Overall Status:  Cluster has all nodes in sync

Nodes details (2) Refresh Reconcile All

	Status	Device Name	Unit Name	Chassis URL	
>	In Sync.	172.16.0.50 Control	172.16.0.50	N/A	⋮
>	In Sync.	172.16.0.51	172.16.0.51	N/A	⋮

Dated: 11:52:26 | 20 Dec 2021 Close

制御ノードには、そのロールを示すグラフィックインジケータがあります。

クラスタメンバーステータスには、次の状態が含まれます。

- 同期中 (In Sync) : ノードは Management Center に登録されています。
- 登録の保留中 (Pending Registration) : ノードはクラスタの一部ですが、まだ Management Center に登録されていません。ノードの登録に失敗した場合は、[すべてを照合 (Reconcile All)] をクリックして登録を再試行できます。
- クラスタリングが無効 (Clustering is disabled) : ノードは Management Center に登録されていますが、クラスタの非アクティブなメンバーです。クラスタリング設定は、後で再有効化する予定がある場合は変更せずに維持できます。また、ノードをクラスタから削除することも可能です。
- クラスタに参加中... (Joining cluster...) : ノードがシャーシ上でクラスタに参加していますが、参加は完了していません。参加後に Management Center に登録されます。

ノードごとに [概要 (Summary)] と [履歴 (History)] を表示できます。

図 28: ノードの [概要 (Summary)]

Status	Device Name	Unit Name	Chassis URL
In Sync.	172.16.0.50 Control	172.16.0.50	N/A

Summary		History	
ID:	0	CCL IP:	10.10.10.1
Site ID:	N/A	CCL MAC:	6c13.d509.4d9a
Serial No:	FJZ2512139M	Module:	N/A
Last join:	05:41:26 UTC Dec 17 2021	Resource:	N/A
Last leave:	N/A		

図 29: ノードの [履歴 (History)]

Status	Device Name	Unit Name	Chassis URL
In Sync.	172.16.0.50 Control	172.16.0.50	N/A

Summary		History	
Timestamp	From State	To State	Event
05:56:31 UTC Dec 17 2021	MASTER	MASTER	Event: Cluster new slave enrollment hold for app 1 is relea...
05:56:31 UTC Dec 17 2021	MASTER	MASTER	Event: Cluster new slave enrollment hold for app 1 is relea...
05:56:29 UTC Dec 17 2021	MASTER	MASTER	Event: Cluster new slave enrollment is on hold for app 1 fo...
05:56:29 UTC Dec 17 2021	MASTER	MASTER	Event: Cluster new slave enrollment is on hold for app 1 fo...

- システム (⚙️) > [Tasks] ページ。

[タスク (Tasks)] ページには、ノードが登録されるたびにクラスタ登録タスクの最新情報が表示されます。

- [デバイス (Devices)] > [デバイス管理 (Device Management)] > cluster_name。 >

デバイスの一覧表示ページでクラスタを展開すると、IPアドレスの横にそのロールが表示されている制御ノードを含む、すべてのメンバーノードを表示できます。登録中のノードには、ロード中のアイコンが表示されます。

- **show cluster {access-list [acl_name] | conn [count] | cpu [usage] | history | interface-mode | memory | resource usage | service-policy | traffic | xlate count}**

クラスタ全体の集約データまたはその他の情報を表示するには、**show cluster** コマンドを使用します。

- **show cluster info [auto-join | clients | conn-distribution | flow-mobility counters | goid [options] | health | incompatible-config | loadbalance | old-members | packet-distribution | trace [options] | transport {asp | cp}]**

クラスタ情報を表示するには、**show cluster info** コマンドを使用します。

クラスタヘルスマニターダッシュボード

Cluster Health Monitor

Threat Defense がクラスタの制御ノードである場合、Management Center はデバイスメトリックデータコレクタからさまざまなメトリックを定期的に収集します。クラスタのヘルスマニターは、次のコンポーネントで構成されています。

- 概要ダッシュボード：クラスタトポロジ、クラスタ統計、およびメトリックチャートに関する情報を表示します。
 - トポロジセクションには、クラスタのライブステータス、個々の脅威防御の状態、脅威防御ノードのタイプ（制御ノードまたはデータノード）、およびデバイスの状態が表示されます。デバイスの状態は、[無効 (Disabled)]（デバイスがクラスタを離れたとき）、[初期状態で追加 (Added out of box)]（パブリッククラウドクラスタで Management Center に属していない追加ノード）、または [標準 (Normal)]（ノードの理想的な状態）のいずれかです。
 - クラスタの統計セクションには、CPU 使用率、メモリ使用率、入力レート、出力レート、アクティブな接続数、および NAT 変換数に関するクラスタの現在のメトリックが表示されます。



(注) CPU とメモリのメトリックは、データプレーンと Snort の使用量の個々の平均を示します。

- メトリックチャート、つまり、CPU 使用率、メモリ使用率、スループット、および接続数は、指定された期間におけるクラスタの統計を図表で示します。
- 負荷分散ダッシュボード：2 つのウィジェットでクラスタノード全体の負荷分散を表示します。
 - 分布ウィジェットには、クラスタノード全体の時間範囲における平均パケットおよび接続分布が表示されます。このデータは、ノードによって負荷がどのように分散されているかを示します。このウィジェットを使用すると、負荷分散の異常を簡単に特定して修正できます。
 - ノード統計ウィジェットには、ノードレベルのメトリックが表形式で表示されます。クラスタノード全体の CPU 使用率、メモリ使用率、入力レート、出力レート、アクティブな接続数、および NAT 変換数に関するメトリックデータが表示されます。このテーブルビューでは、データを関連付けて、不一致を簡単に特定できます。
- メンバーパフォーマンスダッシュボード：クラスタノードの現在のメトリックを表示します。セレクタを使用してノードをフィルタリングし、特定ノードの詳細を表示できます。メトリックデータには、CPU 使用率、メモリ使用率、入力レート、出力レート、アクティブな接続数、および NAT 変換数が含まれます。

- CCLダッシュボード：クラスタの制御リンクデータ、つまり入力レートと出力レートをグラフ形式で表示します。
- トラブルシューティングとリンク：頻繁に使用されるトラブルシューティングのトピックと手順への便利なリンクを提供します。
- 時間範囲：さまざまなクラスタメトリックダッシュボードやウィジェットに表示される情報を制限するための調整可能な時間枠。
- カスタムダッシュボード：クラスタ全体のメトリックとノードレベルのメトリックの両方に関するデータを表示します。ただし、ノードの選択は脅威防御メトリックにのみ適用され、ノードが属するクラスタ全体には適用されません。

クラスタヘルスの表示

この手順を実行するには、管理者ユーザー、メンテナンスユーザー、またはセキュリティアナリストユーザーである必要があります。

クラスタヘルスマニターは、クラスタとそのノードのヘルスステータスの詳細なビューを提供します。このクラスタヘルスマニターは、一連のダッシュボードでクラスタのヘルスステータスと傾向を提供します。

始める前に

- Management Center の 1 つ以上のデバイスからクラスタを作成しているかを確認します。

手順

ステップ 1 システム (⚙️) > [正常性 (Health)] > [モニタ (Monitor)] を選択します。

[モニタリング (Monitoring)] ナビゲーションウィンドウを使用して、ノード固有のヘルスマニターにアクセスします。

ステップ 2 デバイスリストで [展開 (Expand)] (>) と [折りたたみ (Collapse)] (∨) をクリックして、管理対象のクラスタデバイスのリストを展開または折りたたみます。

ステップ 3 クラスタのヘルス統計を表示するには、クラスタ名をクリックします。デフォルトでは、クラスタモニターは、いくつかの事前定義されたダッシュボードで正常性およびパフォーマンスのメトリックを報告します。メトリックダッシュボードには次のものが含まれます。

- [概要 (Overview)]：他の事前定義されたダッシュボードからの主要なメトリックを表示します。ノード、CPU、メモリ、入力レート、出力レート、接続統計情報、NAT 変換情報などが含まれます。
- [負荷分散 (Load Distribution)]：クラスタノード間のトラフィックとパケットの分散。
- [メンバーパフォーマンス (Member Performance)]：CPU 使用率、メモリ使用率、入力スループット、出力スループット、アクティブな接続、および NAT 変換に関するノードレベルの統計情報。

- [CCL] : インターフェイスのステータスおよび集約トラフィックの統計情報。

ラベルをクリックすると、さまざまなメトリックダッシュボードに移動できます。サポートされているクラスタメトリック全体のリストについては、[クラスタメトリック](#)を参照してください。

ステップ 4 右上隅のドロップダウンで、時間範囲を設定できます。最短で1時間前（デフォルト）から、最長では2週間前からの期間を反映できます。ドロップダウンから [Custom] を選択して、カスタムの開始日と終了日を設定します。

更新アイコンをクリックして、自動更新を5分に設定するか、自動更新をオフに切り替えます。

ステップ 5 選択した時間範囲について、トレンドグラフの展開オーバーレイの展開アイコンをクリックします。

展開アイコンは、選択した時間範囲内の展開数を示します。垂直の帯は、展開の開始時刻と終了時刻を示します。複数の展開の場合、複数の帯または線が表示されます。展開の詳細を表示するには、点線の上部にあるアイコンをクリックします。

ステップ 6 （ノード固有のヘルスマニターの場合） ページ上部のデバイス名の右側にあるアラート通知で、ノードの正常性アラートを確認します。

正常性アラートにポインタを合わせると、ノードの正常性の概要が表示されます。ポップアップウィンドウに、上位5つの正常性アラートの概要の一部が表示されます。ポップアップをクリックすると、正常性アラート概要の詳細ビューが開きます。

ステップ 7 （ノード固有のヘルスマニターの場合） デフォルトでは、デバイスモニターは、いくつかの事前定義されたダッシュボードで正常性およびパフォーマンスのメトリックを報告します。メトリックダッシュボードには次のものが含まれます。

- **Overview** : CPU、メモリ、インターフェイス、接続統計情報など、他の定義済みダッシュボードからの主要なメトリックを表示します。ディスク使用量と重要なプロセス情報も含まれます。
- **CPU** : CPU 使用率。プロセス別および物理コア別の CPU 使用率を含みます。
- **Memory** : デバイスのメモリ使用率。データプレーンと Snort のメモリ使用率を含みます。
- **Interfaces** : インターフェイスのステータスおよび集約トラフィック統計情報。
- **Connections** — 接続統計（エレファントフロー、アクティブな接続数、ピーク接続数など）および NAT 変換カウント。
- **[Snort]** : Snort プロセスに関連する統計情報。
- **[ASPドロップ (ASP drops)]** : さまざまな理由でドロップされたパケットに関連する統計情報。

ラベルをクリックすると、さまざまなメトリックダッシュボードに移動できます。サポートされているデバイスメトリック全体のリストについては、[Firepower デバイスのメトリック](#)を参照してください。

ステップ 8 ヘルスモニターの右上隅にあるプラス記号 ([+]) をクリックして、使用可能なメトリックグループから独自の変数セットを構成し、カスタムダッシュボードを作成します。

クラスタ全体のダッシュボードの場合は、クラスタのメトリックグループを選択してから、メトリックを選択します。

クラスタメトリック

クラスタのヘルスモニターは、クラスタとそのノードに関連する統計情報と、負荷分散、パフォーマンス、および CCL トラフィックの統計データの集約結果を追跡します。

表 3: クラスタメトリック

Metric	説明	書式
CPU	クラスタノード上の CPU メトリックの平均（データプレーンと snort についてそれぞれ表示）。	percentage
メモリ	クラスタノード上のメモリメトリックの平均（データプレーンと snort についてそれぞれ表示）。	percentage
データスループット	クラスタの着信および発信データトラフィックの統計。	bytes
CCL スループット	クラスタの着信および発信 CCL トラフィックの統計。	bytes
接続 (Connections)	クラスタ内のアクティブな接続数。	number
NAT Translations	クラスタの NAT 変換数。	number
Distribution	1 秒ごとのクラスタ内の接続分布数。	number
パケット	クラスタ内の 1 秒ごとのパケット配信の件数。	number

クラスタリングの参考資料

このセクションには、クラスタリングの動作に関する詳細情報が含まれます。

Threat Defense の機能とクラスタリング

Threat Defense の一部の機能はクラスタリングではサポートされず、一部は制御ユニットだけでサポートされます。その他の機能については適切な使用に関する警告がある場合があります。

サポートされていない機能とクラスタリング

次の各機能は、クラスタリングが有効なときは設定できず、コマンドは拒否されます。



(注) クラスタリングでもサポートされていない FlexConfig 機能 (WCCP インスペクションなど) を表示するには、[ASA の一般的な操作のコンフィギュレーションガイド](#)を参照してください。FlexConfig では、Management Center GUI にはない多くの ASA 機能を設定できます。

- リモート アクセス VPN (SSL VPN および IPsec VPN)
- DHCP クライアント、サーバー、およびプロキシ。DHCP リレーはサポートされています。
- 仮想トンネルインターフェイス (VTI)
- 高可用性
- 統合ルーティングおよびブリッジング
- FMC UCAPL/CC モード

クラスタリングの中央集中型機能

次の機能は、制御ノード上だけでサポートされます。クラスタの場合もスケーリングされません。



(注) 中央集中型機能のトラフィックは、クラスタ制御リンク経由でメンバーノードから制御ノードに転送されます。

再分散機能を使用する場合は、中央集中型機能のトラフィックが中央集中型機能として分類される前に再分散が行われて、制御ノード以外のノードに転送されることがあります。この場合は、トラフィックが制御ノードに送り返されます。

中央集中型機能については、制御ノードで障害が発生するとすべての接続がドロップされるので、新しい制御ノード上で接続を再確立する必要があります。



(注) クラスタリングでも一元化されている FlexConfig 機能 (RADIUS インスペクションなど) を表示するには、[ASA の一般的な操作のコンフィギュレーションガイド](#)を参照してください。FlexConfig では、Management Center GUI にはない多くの ASA 機能を設定できます。

- 次のアプリケーション インスペクション :
 - DCERPC
 - ESMTP

- NetBIOS
 - PPTP
 - RSH
 - SQLNET
 - SUNRPC
 - TFTP
 - XDMCP
- スタティック ルート モニタリング

Cisco TrustSec とクラスタリング

制御ノードだけがセキュリティグループタグ (SGT) 情報を学習します。その後、制御ノードからデータノードに SGT が渡されるため、データノードは、セキュリティポリシーに基づいて SGT の一致を判断できます。

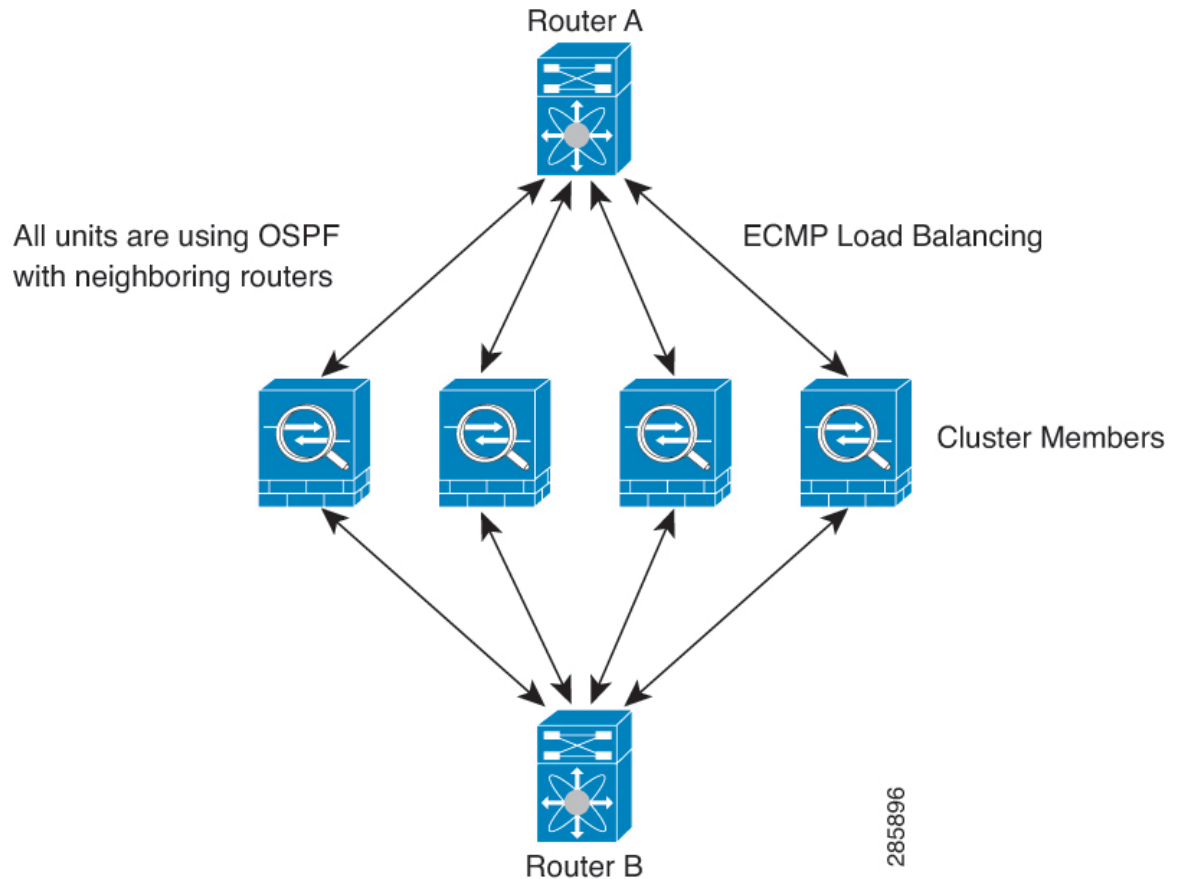
接続設定とクラスタリング

接続制限は、クラスタ全体に適用されます。各ノードには、ブロードキャストメッセージに基づくクラスタ全体のカウンタの推定値があります。クラスタ全体で接続制限を設定しても、効率性を考慮して、厳密に制限数で適用されない場合があります。各ノードでは、任意の時点でのクラスタ全体のカウンタ値が過大評価または過小評価される可能性があります。ただし、ロードバランシングされたクラスタでは、時間の経過とともに情報が更新されます。

ダイナミック ルーティングおよびクラスタリング

個別インターフェイスモードでは、各ノードがスタンドアロンルータとしてルーティングプロトコルを実行します。ルートの学習は、各ノードが個別に行います。

図 30: 個別インターフェイス モードでのダイナミック ルーティング



上の図では、ルータ A はルータ B への等コストパスが 4 本あることを学習します。パスはそれぞれ 1 つのノードを通過します。ECMP を使用して、4 パス間でトラフィックのロードバランシングを行います。各ノードは、外部ルータと通信するときに、それぞれ異なるルータ ID を選択します。

管理者は、各ノードに異なるルータ ID が設定されるように、ルータ ID のクラスタプールを設定する必要があります。

FTP とクラスタリング

- FTPD チャネルとコントロールチャネルのフローがそれぞれ別のクラスタメンバーによって所有されている場合は、D チャネルのオーナーは定期的にアイドルタイムアウトアップデートをコントロールチャネルのオーナーに送信し、アイドルタイムアウト値を更新します。ただし、コントロールフローのオーナーがリロードされて、コントロールフローが再ホスティングされた場合は、親子フロー関係は維持されなくなります。したがって、コントロールフローのアイドルタイムアウトは更新されません。

NAT とクラスタリング

GCP では、アウトバウンドトラフィックにインターフェイス NAT が必要です。インターフェイス NAT を使用したアウトバウンドトラフィックは、64 k 接続に制限されています。その他の NAT の使用については、次の制限事項を参照してください。

NAT は、クラスタの全体的なスループットに影響を与えることがあります。インバウンドおよびアウトバウンドの NAT パケットが、それぞれクラスタ内の別の Threat Defense に送信されることがあります。ロードバランシングアルゴリズムは IP アドレスとポートに依存していませんが、NAT が使用される場合は、インバウンドとアウトバウンドとで、パケットの IP アドレスやポートが異なるからです。NAT オーナーではない Threat Defense に到着したパケットは、クラスタ制御リンクを介してオーナーに転送されるため、クラスタ制御リンクに大量のトラフィックが発生します。NAT オーナーは、セキュリティおよびポリシーチェックの結果に応じてパケットの接続を作成できない可能性があるため、受信側ノードは、オーナーへの転送フローを作成しないことに注意してください。

それでもクラスタリングで NAT を使用する場合は、次のガイドラインを考慮してください。

- プロキシ ARP なし：個別インターフェイスの場合は、マッピングアドレスについてプロキシ ARP 応答が送信されることはありません。これは、クラスタに存在しなくなった可能性のある ASA と隣接ルータとがピア関係を維持することを防ぐためです。アップストリームルータは、メインクラスタ IP アドレスを指すマッピングアドレスについてはステティックルートまたは PBR とオブジェクトトラッキングを使用する必要があります。
- ポートブロック割り当てによる PAT：この機能については、次のガイドラインを参照してください。
 - ホストあたりの最大制限は、クラスタ全体の制限ではなく、ノードごとに個別に適用されます。したがって、ホストあたりの最大制限が 1 に設定されている 3 ノードクラスタでは、ホストからのトラフィックが 3 つのノードすべてにロードバランシングされている場合、3 つのブロックを各ノードに 1 つずつ割り当てることができます。
 - バックアッププールからバックアップノードで作成されたポートブロックは、ホストあたりの最大制限の適用時には考慮されません。
 - PAT プールが完全に新しい IP アドレスの範囲で変更される On-the-fly PAT ルールの変更では、新しいプールが有効になっていてもまだ送信中の xlate バックアップ要求に対する xlate バックアップの作成が失敗します。この動作はポートのブロック割り当て機能に固有なものではなく、プールが分散されトラフィックがクラスタノード間でロードバランシングされるクラスタ展開でのみ見られる一時的な PAT プールの問題です。
 - クラスタで動作している場合、ブロック割り当てサイズを変更することはできません。新しいサイズは、クラスタ内の各デバイスをリロードした後のみ有効になります。各デバイスのリロードの必要性を回避するために、すべてのブロック割り当てルールを削除し、それらのルールに関連するすべての xlate をクリアすることをお勧めします。その後、ブロックサイズを変更し、ブロック割り当てルールを再作成できます。

- **ダイナミック PAT の NAT プールアドレス配布**：PAT プールを設定すると、クラスタはプール内の各 IP アドレスをポートブロックに分割します。デフォルトでは、各ブロックは 512 ポートですが、ポートブロック割り当てルールを設定すると、代わりにユーザのブロック設定が使用されます。これらのブロックはクラスタ内のノード間で均等に分散されるため、各ノードには PAT プール内の IP アドレスごとに 1 つ以上のブロックがあります。したがって、想定される PAT 接続数に対して十分である場合には、クラスタの PAT プールに含める IP アドレスを 1 つだけにすることができます。PAT プールの NAT ルールで予約済みポート 1 ~ 1023 を含めるようにオプションを設定しない限り、ポートブロックは 1024 ~ 65535 のポート範囲をカバーします。
- **複数のルールにおける PAT プールの再利用**：複数のルールで同じ PAT プールを使用するには、ルールにおけるインターフェイスの選択に注意を払う必要があります。すべてのルールで特定のインターフェイスを使用するか、あるいはすべてのルールで「任意の」インターフェイスを使用するか、いずれかを選択する必要があります。ルール全般にわたって特定のインターフェイスと「任意」のインターフェイスを混在させることはできません。混在させると、システムがリターントラフィックとクラスタ内の適切なノードを一致させることができなくなる場合があります。ルールごとに固有の PAT プールを使用することは、最も信頼性の高いオプションです。
- **ラウンドロビンなし**：PAT プールのラウンドロビンは、クラスタリングではサポートされません。
- **拡張 PAT なし**：拡張 PAT はクラスタリングでサポートされません。
- **制御ノードによって管理されるダイナミック NAT xlate**：制御ノードが xlate テーブルを維持し、データノードに複製します。ダイナミック NAT を必要とする接続をデータノードが受信したときに、その xlate がテーブル内にない場合、データノードは制御ノードに xlate を要求します。データノードが接続を所有します。
- **旧式の xlates**：接続所有者の xlate アイドル時間が更新されません。したがって、アイドル時間がアイドルタイムアウトを超える可能性があります。refcnt が 0 で、アイドルタイマー値が設定されたタイムアウトより大きい場合は、旧式の xlate であることを示します。
- 次のインスペクション用のスタティック PAT はありません。
 - FTP
 - RSH
 - SQLNET
 - TFTP
 - XDMCP
 - SIP
- 1 万を超える非常に多くの NAT ルールがある場合は、デバイスの CLI で **asp rule-engine transactional-commit nat** コマンドを使用してトランザクション コミット モデルを有効にする必要があります。有効にしないと、ノードがクラスタに参加できない可能性があります。

SIP インスペクションとクラスタリング

制御フローは、（ロードバランシングにより）任意のノードに作成できますが、子データフローは同じノードに存在する必要があります。

SNMP とクラスタリング

SNMP エージェントは、個々の Threat Defense を、その [診断 (Diagnostic)] 診断インターフェイスのローカル IP アドレスによってポーリングします。クラスタの統合データをポーリングすることはできません。

SNMP ポーリングには、メインクラスタ IP アドレスではなく、常にローカルアドレスを使用してください。SNMP エージェントがメインクラスタ IP アドレスをポーリングする場合、新しい制御ノードが選択されると、新しい制御ノードのポーリングは失敗します。

クラスタリングで SNMPv3 を使用している場合、最初のクラスタ形成後に新しいクラスタノードを追加すると、SNMPv3 ユーザーは新しいノードに複製されません。ユーザーを削除して再追加し、設定を再展開して、ユーザーを新しいノードに強制的に複製する必要があります。

syslog とクラスタリング

- クラスタの各ノードは自身の syslog メッセージを生成します。ロギングを設定して、各ノードの syslog メッセージヘッダーフィールドで同じデバイス ID を使用するか、別の ID を使用するかを設定できます。たとえば、ホスト名設定はクラスタ内のすべてのノードに複製されて共有されます。ホスト名をデバイス ID として使用するようロギングを設定した場合、すべてのノードで生成される syslog メッセージが1つのノードから生成されているように見えます。クラスタブートストラップ設定で割り当てられたローカルノード名をデバイス ID として使用するようロギングを設定した場合、syslog メッセージはそれぞれ別のノードから生成されているように見えます。

VPN とクラスタリング

サイト間 VPN は、中央集中型機能です。制御ノードのみが VPN 接続をサポートします。



(注) リモートアクセス VPN は、クラスタリングではサポートされません。

VPN 機能を使用できるのは制御ノードだけであり、クラスタの高可用性機能は活用されません。制御ノードで障害が発生した場合は、すべての既存の VPN 接続が失われ、VPN ユーザにとってはサービスの中断となります。新しい制御ノードが選定されたときに、VPN 接続を再確立する必要があります。

PBR または ECMP を使用するときの個別インターフェイスへの接続については、ローカルアドレスではなく、常にメインクラスタ IP アドレスに接続する必要があります。

VPN 関連のキーと証明書は、すべてのノードに複製されます。

パフォーマンス スケーリング係数

複数のユニットをクラスタに結合すると、期待できる合計クラスタパフォーマンスは、最大合計スループットの約 80%になります。

たとえば、モデルが単独稼働で約 10 Gbps のトラフィックを処理できる場合、8 ユニットのクラスタでは、最大合計スループットは 80 Gbps (8 ユニット x 10 Gbps) の約 80% で 64 Gbps になります。

制御ノードの選定

クラスタのノードは、クラスタ制御リンクを介して通信して制御ノードを選定します。方法は次のとおりです。

1. ノードに対してクラスタリングをイネーブルにしたとき（または、クラスタリングがイネーブル済みの状態でそのユニットを初めて起動したとき）に、そのノードは選定要求を 3 秒間隔でブロードキャストします。
2. プライオリティの高い他のノードがこの選定要求に応答します。プライオリティは 1 ~ 100 の範囲内で設定され、1 が最高のプライオリティです。
3. 45 秒経過しても、プライオリティの高い他のノードからの応答を受信していない場合は、そのノードが制御ノードになります。



(注) 最高のプライオリティを持つノードが複数ある場合は、クラスタノード名、次にシリアル番号を使用して制御ノードが決定されます。

4. 後からクラスタに参加したノードのプライオリティの方が高い場合でも、そのノードが自動的に制御ノードになることはありません。既存の制御ノードは常に制御ノードのままです。ただし、制御ノードが応答を停止すると、その時点で新しい制御ノードが選定されます。
5. 「スプリットブレイン」シナリオで一時的に複数の制御ノードが存在する場合、優先順位が最も高いノードが制御ノードの役割を保持し、他のノードはデータノードの役割に戻ります。



(注) ノードを手動で強制的に制御ノードにすることができます。中央集中型機能については、制御ノード変更を強制するとすべての接続がドロップされるので、新しい制御ノード上で接続を再確立する必要があります。

クラスタ内のハイアベイラビリティ

クラスタリングは、ノードとインターフェイスの正常性をモニターし、ノード間で接続状態を複製することにより、ハイアベイラビリティを実現します。

ノードヘルスマニタリング

各ノードは、クラスタ制御リンクを介してブロードキャスト ハートビート パケットを定期的に送信します。設定可能なタイムアウト期間内にデータノードからハートビートパケットまたはその他のパケットを受信しない場合、制御ノードはクラスタからデータノードを削除します。データノードが制御ノードからパケットを受信しない場合、残りのノードから新しい制御ノードが選択されます。

ノードで実際に障害が発生したためではなく、ネットワークの障害が原因で、ノードがクラスタ制御リンクを介して相互に通信できない場合、クラスタは「スプリットブレイン」シナリオに移行する可能性があります。このシナリオでは、分離されたデータノードが独自の制御ノードを選択します。たとえば、2つのクラスタロケーション間でルータに障害が発生した場合、ロケーション1の元の制御ノードは、ロケーション2のデータノードをクラスタから削除します。一方、ロケーション2のノードは、独自の制御ノードを選択し、独自のクラスタを形成します。このシナリオでは、非対称トラフィックが失敗する可能性があることに注意してください。クラスタ制御リンクが復元されると、より優先順位の高い制御ノードが制御ノードの役割を保持します。

インターフェイス モニタリング

各ノードは、使用中のすべての指名されたハードウェアインターフェイスのリンクステータスをモニタし、ステータス変更を制御ノードに報告します。

すべての物理インターフェイスがモニタリングされます。ただし、モニタリングできるのは、名前付きインターフェイスのみです。ヘルスチェックは、インターフェイスごとに、モニタリングをオプションで無効にすることができます。

ノードのモニタ対象のインターフェイスが失敗した場合、そのノードはクラスタから削除されます。ノードは 500 ミリ秒後に削除されます。

障害後のステータス

クラスタ内のノードで障害が発生したときに、そのノードでホストされている接続は他のノードにシームレスに移行されます。トラフィックフローのステート情報は、制御ノードのクラスタ制御リンクを介して共有されます。

制御ノードで障害が発生した場合、そのクラスタの他のメンバーのうち、優先順位が最高（番号が最小）のメンバーが制御ノードになります。

障害イベントに応じて、Threat Defense は自動的にクラスタへの再参加を試みます。



-
- (注) Threat Defense が非アクティブになり、クラスタへの自動再参加に失敗すると、すべてのデータインターフェイスがシャットダウンされ、管理/診断インターフェイスのみがトラフィックを送受信できます。
-

クラスタへの再参加

クラスタメンバがクラスタから削除された後、クラスタに再参加するための方法は、削除された理由によって異なります。

- 最初に参加するときに障害が発生したクラスタ制御リンク：クラスタ制御リンクの問題を解決した後、クラスタリングを再び有効にして、手動でクラスタに再参加する必要があります。
- クラスタに参加した後に障害が発生したクラスタ制御リンク：FTDは、無限に5分ごとに自動的に再参加を試みます。
- データインターフェースの障害：Threat Defense は自動的に最初は5分後、次に10分後、最終的に20分後に再参加を試みます。20分後に参加できない場合、Threat Defense アプリケーションはクラスタリングを無効にします。データインターフェースの問題を解決した後、手動でクラスタリングを有効にする必要があります。
- ノードの障害：ノードがヘルスチェック失敗のためクラスタから削除された場合、クラスタへの再参加は失敗の原因によって異なります。たとえば、一時的な電源障害の場合は、クラスタ制御リンクが稼働している限り、ノードは再起動するとクラスタに再参加します。Threat Defense アプリケーションは5秒ごとにクラスタへの再参加を試みます。
- 内部エラー：内部エラーには、アプリケーション同期のタイムアウト、一貫性のないアプリケーションステータスなどがあります。問題の解決後、クラスタリングを再度有効にして手動でクラスタに再参加する必要があります。
- 障害が発生した設定の展開：FMC から新しい設定を展開し、展開が一部のクラスタメンバーでは失敗したものの、他のメンバーでは成功した場合、失敗したノードはクラスタから削除されます。クラスタリングを再度有効にして手動でクラスタに再参加する必要があります。制御ノードで展開が失敗した場合、展開はロールバックされ、メンバーは削除されません。すべてのデータノードで展開が失敗した場合、展開はロールバックされ、メンバーは削除されません。

データ パス接続状態の複製

どの接続にも、1つのオーナーおよび少なくとも1つのバックアップオーナーがクラスタ内にあります。バックアップオーナーは、障害が発生しても接続を引き継ぎません。代わりに、TCP/UDP のステート情報を保存します。これは、障害発生時に接続が新しいオーナーにシームレスに移管されるようにするためです。バックアップオーナーは通常ディレクタでもありません。

トラフィックの中には、TCP または UDP レイヤよりも上のステート情報を必要とするものがあります。この種類のトラフィックに対するクラスタリングのサポートの可否については、次の表を参照してください。

表 4: クラスタ全体で複製される機能

トラフィック	状態のサポート	注
アップタイム	対応	システムアップタイムをトラッキングします。

トラフィック	状態のサポート	注
ARP テーブル	対応	—
MAC アドレス テーブル	対応	—
ユーザ アイデンティティ	対応	—
IPv6 ネイバー データベース	対応	—
ダイナミック ルーティング	対応	—
SNMP エンジン ID	なし	—

クラスタが接続を管理する方法

接続をクラスタの複数のノードにロードバランシングできます。接続のロールにより、通常動作時とハイ アベイラビリティ状況時の接続の処理方法が決まります。

接続のロール

接続ごとに定義された次のロールを参照してください。

- **オーナー**：通常、最初に接続を受信するノード。オーナーは、TCP 状態を保持し、パケットを処理します。1 つの接続に対してオーナーは 1 つだけです。元のオーナーに障害が発生すると、新しいノードが接続からパケットを受信したときにディレクタがそれらのノードの新しいオーナーを選択します。
- **バックアップオーナー**：オーナーから受信した TCP/UDP ステート情報を格納するノード。障害が発生した場合、新しいオーナーにシームレスに接続を転送できます。バックアップオーナーは、障害発生時に接続を引き継ぎません。オーナーが使用不可能になった場合、（ロードバランシングに基づき）その接続からのパケットを受信する最初のノードがバックアップオーナーに問い合わせ、関連するステート情報を取得し、そのノードが新しいオーナーになります。

ディレクタ（下記参照）がオーナーと同じノードでない限り、ディレクタはバックアップオーナーでもあります。オーナーが自分をディレクタとして選択した場合は、別のバックアップオーナーが選択されます。

1 台のシャーシに最大 3 つのクラスタノードを搭載できる Firepower 9300 のクラスタリングでは、バックアップオーナーがオーナーと同じシャーシにある場合、シャーシ障害からフローを保護するために、別のシャーシから追加のバックアップオーナーが選択されます。

- **ディレクタ**：フォワーダからのオーナールックアップ要求を処理するノード。オーナーは、新しい接続を受信すると、送信元/宛先 IP アドレスおよびポートのハッシュに基づいてディレクタを選択し、新しい接続を登録するためにそのディレクタにメッセージを送信します。パケットがオーナー以外のノードに到着した場合、そのノードはどのノードがオーナーかをディレクタに問い合わせることで、パケットを転送できます。1 つの接続に

対してディレクタは1つだけです。ディレクタが失敗すると、オーナーは新しいディレクタを選択します。

ディレクタがオーナーと同じノードでない限り、ディレクタはバックアップオーナーでもあります（上記参照）。オーナーがディレクタとして自分自身を選択すると、別のバックアップオーナーが選択されます。

ICMP/ICMPv6 ハッシュの詳細：

- エコーパケットの場合、送信元ポートは ICMP 識別子で、宛先ポートは 0 です。
 - 応答パケットの場合、送信元ポートは 0 で、宛先ポートは ICMP 識別子です。
 - 他のパケットの場合、送信元ポートと宛先ポートの両方が 0 です。
- フォワーダ：パケットをオーナーに転送するノード。フォワーダが接続のパケットを受信したときに、その接続のオーナーが自分ではない場合は、フォワーダはディレクタにオーナーを問い合わせしてから、そのオーナーへのフローを確立します。これは、この接続に関してフォワーダが受信するその他のパケット用です。ディレクタは、フォワーダにもなることができます。フォワーダが SYN-ACK パケットを受信した場合、フォワーダはパケットの SYN クッキーからオーナーを直接取得できるので、ディレクタに問い合わせる必要がないことに注意してください。（TCP シーケンスのランダム化を無効にした場合は、SYN Cookie は使用されないため、ディレクタへの問い合わせが必要です）。存続期間が短いフロー（たとえば DNS や ICMP）の場合は、フォワーダは問い合わせの代わりにパケットを即座にディレクタに送信し、ディレクタがそのパケットをオーナーに送信します。1つの接続に対して、複数のフォワーダが存在できます。最も効率的なスループットを実現できるのは、フォワーダが1つもなく、接続のすべてのパケットをオーナーが受信するという、優れたロードバランシング方法が使用されている場合です。



(注) クラスタリングを使用する場合は、TCP シーケンスのランダム化を無効にすることは推奨されません。SYN/ACK パケットがドロップされる可能性があるため、一部の TCP セッションが確立されない可能性があります。

- フラグメントオーナー：フラグメント化されたパケットの場合、フラグメントを受信するクラスタノードは、フラグメントの送信元と宛先の IP アドレス、およびパケット ID のハッシュを使用してフラグメントオーナーを特定します。その後、すべてのフラグメントがクラスタ制御リンクを介してフラグメント所有者に転送されます。スイッチのロードバランスハッシュで使用される 5 タプルは、最初のフラグメントにのみ含まれているため、フラグメントが異なるクラスタノードにロードバランシングされる場合があります。他のフラグメントには、送信元ポートと宛先ポートは含まれず、他のクラスタノードにロードバランシングされる場合があります。フラグメント所有者は一時的にパケットを再アセンブルするため、送信元/宛先 IP アドレスとポートのハッシュに基づいてディレクタを決定できます。新しい接続の場合は、フラグメントの所有者が接続所有者として登録されます。これが既存の接続の場合、フラグメント所有者は、クラスタ制御リンクを介して、指

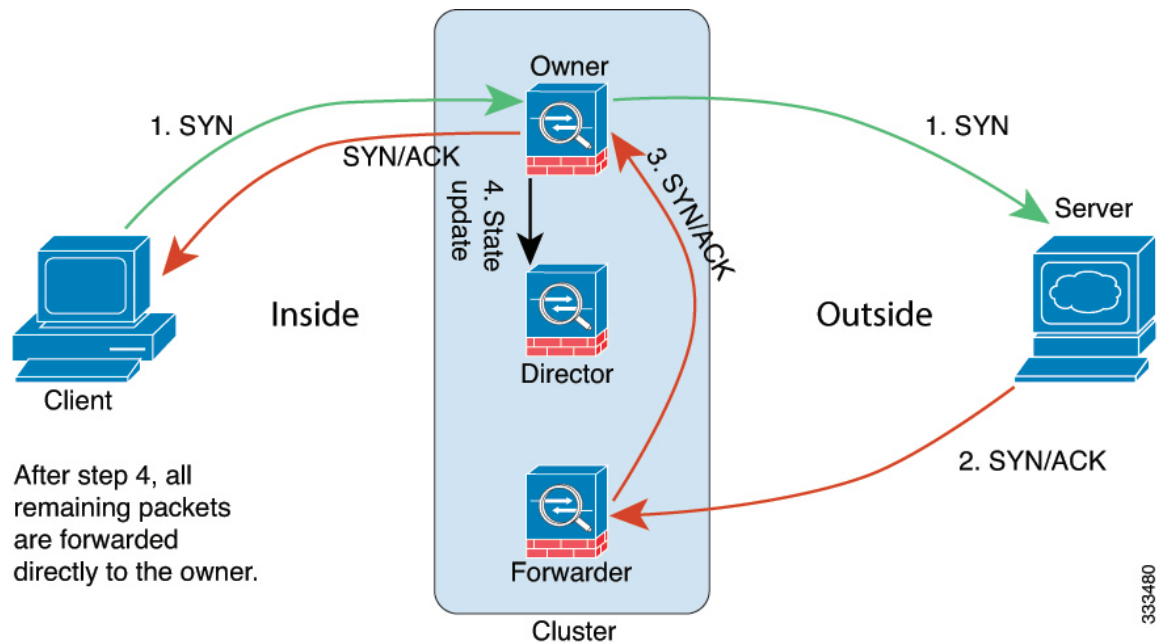
定された接続所有者にすべてのフラグメントを転送します。その後、接続の所有者はすべてのフラグメントを再構築します。

新しい接続の所有権

新しい接続がロードバランシング経由でクラスタのノードに送信される場合は、そのノードがその接続の両方向のオーナーとなります。接続の packets が別のノードに到着した場合は、その packets はクラスタ制御リンクを介してオーナーノードに転送されます。逆方向のフローが別のノードに到着した場合は、元のノードにリダイレクトされます。

TCP のサンプルデータフロー

次の例は、新しい接続の確立を示します。



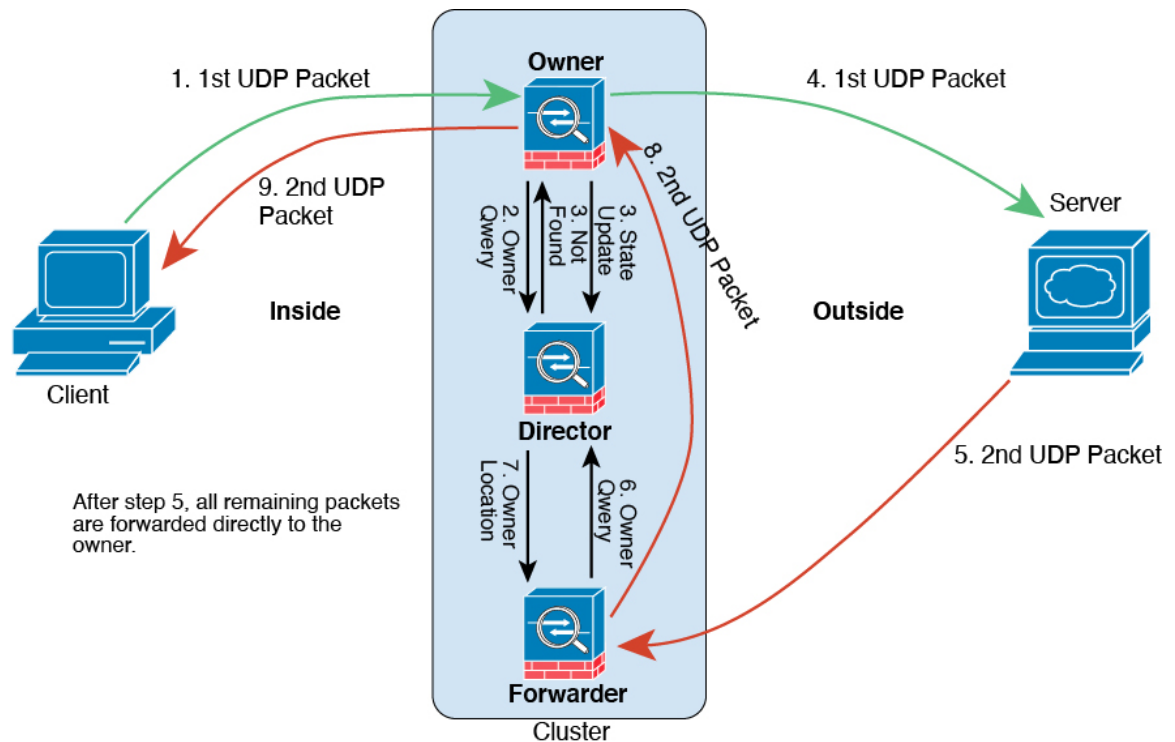
1. SYN パケットがクライアントから発信され、Threat Defense の 1 つ（ロードバランシング方法に基づく）に配信されます。これがオーナーとなります。オーナーはフローを作成し、オーナー情報をエンコードして SYN Cookie を生成し、パケットをサーバに転送します。
2. SYN-ACK パケットがサーバから発信され、別の Threat Defense（ロードバランシング方法に基づく）に配信されます。この Threat Defense はフォワーダです。
3. フォワーダはこの接続を所有してはいないので、オーナー情報を SYN Cookie からデコードし、オーナーへの転送フローを作成し、SYN-ACK をオーナーに転送します。
4. オーナーはディレクタに状態アップデートを送信し、SYN-ACK をクライアントに転送します。

5. ディレクタは状態アップデートをオーナーから受信し、オーナーへのフローを作成し、オーナーと同様に TCP 状態情報を記録します。ディレクタは、この接続のバックアップオーナーとしての役割を持ちます。
6. これ以降、フォワーダに配信されたパケットはすべて、オーナーに転送されます。
7. パケットがその他のノードに配信された場合、そのノードはディレクタに問い合わせ、オーナーを特定し、フローを確立します。
8. フローの状態が変化した場合、状態アップデートがオーナーからディレクタに送信されます。

ICMP および UDP のサンプルデータフロー

次の例は、新しい接続の確立を示します。

1. 図 31: ICMP および UDP データフロー



UDP パケットがクライアントから発信され、1つの Threat Defense（ロードバランシング方法に基づく）に配信されます。

2. 最初のパケットを受信したノードは、送信元/宛先 IP アドレスとポートのハッシュに基づいて選択されたディレクタノードをクエリします。
3. ディレクタは既存のフローを検出せず、ディレクタフローを作成して、以前のノードにパケットを転送します。つまり、ディレクタがこのフローのオーナーを選択したことになります。

4. オーナーはフローを作成し、ディレクタに状態アップデートを送信して、サーバーにパケットを転送します。
5. 2 番目の UDP パケットはサーバーから発信され、フォワーダに配信されます。
6. フォワーダはディレクタに対して所有権情報をクエリします。存続期間が短いフロー（DNS など）の場合、フォワーダはクエリする代わりにパケットを即座にディレクタに送信し、ディレクタがそのパケットをオーナーに送信します。
7. ディレクタは所有権情報をフォワーダに返信します。
8. フォワーダは転送フローを作成してオーナー情報を記録し、パケットをオーナーに転送します。
9. オーナーはパケットをクライアントに転送します。

パブリッククラウドの Threat Defense Virtual クラスタリングの履歴

機能	バージョン	詳細
クラスタのヘルスマニターの設定	7.3	<p>クラスタのヘルスマニター設定を編集できるようになりました。</p> <p>新規/変更された画面：[デバイス (Devices)] > [デバイス管理 (Device Management)] > クラスタ (Cluster) > [クラスタのヘルスマニターの設定 (Cluster Health Monitor Settings)]</p> <p>(注) 以前に FlexConfig を使用してこれらの設定を行った場合は、展開前に必ず FlexConfig の設定を削除してください。削除しなかった場合は、FlexConfig の設定によって Management Center の設定が上書きされます。</p>
クラスタヘルスマニターダッシュボード	7.3	<p>クラスタのヘルスマニターダッシュボードでクラスタの状態を表示できるようになりました。</p> <p>新規/変更された画面：システム (⚙️) > [正常性 (Health)] > [モニタ (Monitor)]</p>

機能	バージョン	詳細
Azure の Threat Defense Virtual のクラスタリング	7.3	<p>Azure ゲートウェイロードバランサまたは外部のロードバランサについて、Azure の Threat Defense Virtual で最大 16 ノードのクラスタリングを構成できるようになりました。</p> <p>新規/変更された画面：</p> <ul style="list-style-type: none"> • [デバイス (Devices)] > [デバイス管理 (Device Management)] > [クラスタの追加 (Add Cluster)] • [デバイス (Devices)] > [デバイス管理 (Device Management)] > [詳細 (More)]メニュー • [Devices] > [Device Management] > [Cluster] <p>サポートされているプラットフォーム：Azure の Threat Defense Virtual</p>
パブリッククラウドでの Threat Defense Virtual のクラスタリング (Amazon Web Services および Google Cloud Platform)	7.2	<p>Threat Defense Virtual はパブリッククラウド (AWS および GCP) で最大 16 ノードの個別インターフェイスのクラスタリングをサポートします。</p> <p>新しい/変更された画面：</p> <ul style="list-style-type: none"> • [デバイス (Devices)] > [デバイス管理 (Device Management)] > [デバイスの追加 (Add Device)] • [デバイス (Devices)] > [デバイス管理 (Device Management)] > [詳細 (More)]メニュー • [Devices] > [Device Management] > [Cluster] <p>サポートされているプラットフォーム：AWS および GCP 上の Threat Defense Virtual</p>

翻訳について

このドキュメントは、米国シスコ発行ドキュメントの参考和訳です。リンク情報につきましては、日本語版掲載時点で、英語版にアップデートがあり、リンク先のページが移動/変更されている場合がありますことをご了承ください。あくまでも参考和訳となりますので、正式な内容については米国サイトのドキュメントを参照ください。